

飯盛西地区圃場整備関係発掘調査報告書 1

牛丸B遺跡1・寺ノ上遺跡1・羽根戸南古墳群2

2016

福岡市教育委員会

飯盛西地区圃場整備関係発掘調査報告書 1

牛丸B遺跡1・寺ノ上遺跡1・羽根戸南古墳群2



2 0 1 6

福岡市教育委員会

序

福岡市は、土地区画整理や農業基盤整備を行い都市機能の拡充や農業振興に取り組んでおりますが、特に昭和の終わりから平成の初めにかけて、大型の圃場整備事業が行われました。日本最古の王墓で話題を呼んだ吉武高木遺跡も昭和時代の終わりに行われた飯盛・吉武地区圃場整備で発見されました。

今回報告する、飯盛西地区圃場整備に伴う発掘調査は、飯盛・吉武地区とほぼ同じ年代に、同地区的西側で行われました。事業は4か年に渡り実施され、寺ノ上遺跡・牛丸B遺跡・飯盛谷B遺跡・羽根戸南古墳群が調査されました。このうち飯盛谷B遺跡では3基の方形周溝墓などから、舶載鏡の破鏡や畿内型の石鏡が発見され、また羽根戸南古墳群E群では6世紀初頭から末に至る古墳5基が発掘されるなど多くの成果を得ていただきましたが、発掘調査報告書が未刊となっていました。

今回、約30年ぶりに、寺ノ上遺跡・牛丸B遺跡・羽根戸南古墳群D-1号墳の発掘調査報告書を行ふことができました。来年度以降、飯盛谷B遺跡・羽根戸南古墳群E群の発掘調査報告書作成に取り組んでまいりたいと考えております。

本書が、市民を始めとする多くの方々にとって、一助になれば幸いです。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

1 本書は、昭和58年度から61年度に実施した福岡市西区飯盛西地区圃場整備事業に伴い、福岡市教育委員会が行った発掘調査の報告書で、昭和58年度調査及び昭和60年度調査について所収している。なお発掘調査は一部国庫補助事業として、下記のとおり実施した。

昭和58年度 寺ノ上遺跡第1次	調査番号 8341
(本書所収) 牛丸B遺跡第1次	調査番号 8348
担当 井澤洋一・松村道博	調査期間 1983年11月1日～12月15日
昭和59年度 飯盛谷B遺跡第1次	調査番号 8411
担当 井澤洋一・米倉秀紀	調査期間 1985年2月5日～3月31日
昭和60年度 羽根戸南古墳群第1次(D-1号墳等)	調査番号 8539
(本書所収) 担当 米倉秀紀	調査期間 1986年1月23日～3月4日
昭和61年度 羽根戸南古墳群第2次(E-4～8号墳等)	調査番号 8629
担当 山崎龍雄・米倉秀紀	調査期間 1986年7月29日～12月28日

2 当時の調査の通称は、昭和58年度調査を飯盛西圃場1次、以下年度毎に2次・3次・4次としていたが、各遺跡の調査次数と紛らわしいため、本書では、○○年度調査とした。また、発掘調査出土遺物注記は、当初飯盛西地区圃場整備の調査の略号ということでIMNとし、牛丸B遺跡をIMN I区と、寺ノ上遺跡をIMN II区とした。羽根戸南古墳群D-1号墳は、飯盛西3次調査の略号IMN 3としている。また、調査当時、福岡市では現在の遺構略号(SD・SE等)を共通採用しておらず、本調査時は 土坑:D、竪穴住居跡:J、溝:M、掘立柱建物:SBと呼称していたが、本書では、牛丸B遺跡・寺ノ上遺跡では、1号竪穴住居等の記載とし、羽根戸南古墳群は溝:SD、土坑:SK等の現在の略号に改めた。

3 本書における遺構図作成は調査担当者が行った。

4 本書における遺構写真撮影は調査担当者が行った。

5 本書における遺物実測者は、調査担当者の他、下記の者が行った。

昭和58年度調査 櫻義久美子

昭和60年度調査 井上加代子

6 本書における遺物写真撮影は米倉が行った。

7 本書における図面のトレースは調査担当者の他、下記の者が行った。

昭和58年度調査 櫻義久美子

昭和60年度調査 井上加代子

8 本書の執筆は、I・II・V章を米倉が、III・IV章を松村が行った。

9 本書の編集は米倉が行った。

遺跡名	牛丸B遺跡	調査次数	1次	調査略号	USB
調査番号	8348	分布地図図幅名	93	遺跡登録番号	414
調査地	西区大字飯盛字牛丸地内			調査面積	761m ²
調査期間	1983.11.01～1983.12.02				

遺跡名	寺ノ上遺跡	調査次数	1次	調査略号	TNU
調査番号	8341	分布地図図幅名	93	遺跡登録番号	412
調査地	西区大字飯盛寺ノ上地内			調査面積	438m ²
調査期間	1983.11.20～1983.12.15				

遺跡名	羽根戸南古墳群（D—1号）	調査次数	1次	調査略号	HMK-D
調査番号	8539	分布地図図幅名	105	遺跡登録番号	569
調査地	西区大字羽根戸地内			調査面積	550m ²
調査期間	1986.01.23～1986.03.04				

本文目次

I 飯盛西地区圃場整備に伴う発掘調査について	9
II 位置と環境	11
III 牛丸B遺跡（調査番号8348）	
1 はじめ	13
2 調査の記録	15
(1) 調査の概要	15
(2) 遺構と遺物	15
① 喫穴住居跡	15
② 掘立柱建物	18
③ ピット出土土器	19
④ その他の出土遺物	20
3 小結	20
IV 寺ノ上遺跡（調査番号 8341）	
1 はじめ	21
2 調査の記録	21
(1) 調査の概要	21
(2) 遺構と遺物	21
①溝・溝状遺構	21
②包含層出土遺物	29
3 小結	29
V 羽根戸南古墳群D-1号墳（調査番号8539）	
1 はじめ	30
2 D-1号墳	31
(1) 現況	31
(2) 墳丘	32
(3) 石室	32
(4) 墓道	32
(5) 小石室	38
(6) 古墳出土遺物	40
3 その他の遺構と遺物	48
4 まとめ	54

挿図目次

I

第1図 飯盛西地区圃場整備関連遺跡位置図 (1/7,000) 10

II

第1図 早良平野北部の主要遺跡位置図 (1/70,000) 12

III

第1図 調査区位置図 (1/4,000) 13

第2図 牛丸遺跡全体実測図 (1/200) 14

第3図 穴穴住居跡実測図 (1/80) 15

第4図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) 16

第5図 1号～3号掘立柱建物実測図 (1/80) 17

第6図 ピット出土遺物実測図 (1/3,1/2) 18

第7図 包含層・表土出土遺物実測図 (1/3) 19

IV

第1図 寺ノ上遺跡全体測量図 (1/400) 21

第2図 1・2号溝及び調査区南壁土層実測図 (1/100,1/80) 22

第3図 1号溝出土遺物実測図 (1/3,1/4) 23

第4図 2号溝上・中層出土遺物実測図 (1/3) 24

第5図 2号溝下層出土遺物実測図1 (1/3) 26

第6図 2号溝下層出土遺物実測図2 (1/3) 27

第7図 3号溝出土遺物実測図 (1/3) 28

第8図 包含層出土遺物実測図 (1/3) 28

V

第1図 羽根戸南古墳群位置図 30

第2図 羽根戸南古墳群D-1号墳位置図 31

第3図 羽根戸南古墳群D-1号墳現況測量図 (1/200) 33

第4図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘遺存面測量図 (1/150) 34

第5図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘土層断面図 (1/60) 35

第6図 羽根戸南古墳群D-1号墳外縁列石実測図 (1/60) 36

第7図 羽根戸南古墳群D-1号墳地山形実測図 (1/200) 36

第8図 羽根戸南古墳群D-1号墳石室実測図 (1/60) 37

第9図 羽根戸南古墳群D-1号墳閉窓石室実測図 (1/60) 38

第10図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道遺物出土状況実測図 (1/60) 及び墓道土層断面図 (1/60) 39

第11図 羽根戸南古墳群D-1号墳小石室実測図 (1/40) 40

第12図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘出土遺物実測図1 (1/3,1/4) 41

第13図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘出土遺物実測図2 (1/3,1/4) 42

第14図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘裾部出土遺物実測図1 (1/3) 42

第15図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘裾部出土遺物実測図2 (1/4) 43

第16図 羽根戸南古墳群D-1号墳出土鉄器・玉類実測図 (1/2) 44

第17図 羽根戸南古墳群D-1号墳玄室出土遺物実測図(1/3)	44
第18図 羽根戸南古墳群D-1号墳羨道出土遺物実測図(1/3,1/4)	45
第19図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図1(1/3)	47
第20図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図2(1/3)	48
第21図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図3(1/4)	49
第22図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図(S D 0 2)(1/3)	50
第23図 その他の遺構実測図(1/40,1/60)	51
第24図 その他の遺構出土遺物実測図(1/3)	52
第25図 出土縄文土器・石器実測図(1/3,2/3)	53

図 版 目 次

図版1 牛丸B遺跡出土遺物	57
図版2 寺ノ上遺跡出土遺物1	58
図版3 寺ノ上遺跡出土遺物2	59
図版4 寺ノ上遺跡出土遺物3	60
図版5 羽根戸南古墳群D-1号墳遠景	61
図版6 羽根戸南古墳群D-1号墳現況・調査区全景	62
図版7 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘遺存面全景	63
図版8 羽根戸南古墳群D-1号墳石室全景(墳丘遺存面時)	64
図版9 羽根戸南古墳群D-1号墳地山整形面全景	65
図版10 羽根戸南古墳群D-1号墳石室全景(地山整形時)・入口部分	66
図版11 羽根戸南古墳群D-1号墳玄室	67
図版12 羽根戸南古墳群D-1号墳石室楕石・閉塞石	68
図版13 羽根戸南古墳群D-1号墳羨道・墓道	69
図版14 羽根戸南古墳群D-1号墳外籠列石・墳丘土層断面・小石室検出状況	70
図版15 羽根戸南古墳群D-1号墳小石室	71
図版16 羽根戸南古墳群D-1号墳羨道部・墓道遺物出土状況	72
図版17 昭和60年度調査区発掘調査作業風景・遺構群全景	73
図版18 上:SK02周辺 中:SK02 下:SK02十層断面	74
図版19 上:SK03 中:SK04 下:SK07	75
図版20 上:SK09 中:SD01 下:1区上器だまり	76
図版21 羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物1	77
図版22 羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物2	78
図版23 羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物3	79
図版24 羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物4	80

I 飯盛西地区圃場整備に伴う発掘調査について

昭和57年度、福岡市土木農林課から福岡市飯盛地内における飯盛西地区圃場整備計画の申請がなされた。計画は飯盛西地区土地改良区による組合施行による圃場整備で、昭和58年度から同61年度まで4年間に渡って行うものである。計画地内には牛丸B遺跡・寺ノ上遺跡・飯盛谷B遺跡・羽根戸南古墳群を含んでいた。土木農林課・土地整理組合・福岡市教育委員会の協議の結果、各工事年度の前年度に確認調査を行い、埋蔵文化財が発見された場合は、速やかに発掘調査を実施することを確認した。なお、発掘調査には一部国庫補助金を充当することとした。

まず昭和58年2月に初年度計画分の牛丸B遺跡・寺ノ上遺跡について確認調査を行った結果、遺構・遺物が発見されたので、同年11月1日より牛丸B遺跡、同11月20日より寺ノ上遺跡の発掘調査を開始し、同年12月15日に、同圃場整備の第1次調査を終了した。牛丸B遺跡では古墳時代後期の竪穴住居、古代の建物等が見つかった。寺ノ上遺跡では、2条の溝を検出しただけであるが、平安時代後期の土器・陶磁器が多く出土した。

昭和59年度分の調査は、昭和60年2月5日～3月31日に、飯盛谷B遺跡の発掘調査を実施した。同遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の方形周溝墓3基、腰棺5基が小さな舌状台地上に展開し、その台地には溝が巡っている。方形周溝墓は3基とも主体部が異なっている。方形周溝墓の周溝から石鉗、台地を巡る溝から方格規矩鏡（破鏡）が出土した。またこれらの墓以外に集落跡も検出した。

昭和60年度分調査は、昭和61年1月23日～3月4日に、羽根戸南古墳群D-1号墳の発掘調査を実施した。同古墳は直径約15mの円墳で、横穴式石室を主体部に持つ。玄室は盜掘されていたものの、羨道部・前底部から須恵器を始めとする多くの遺物が出土した。古墳以外に時期不明の土坑群が検出され、押形文土器などが出土した。

昭和61年度分調査は昭和61年7月29日～12月28日に、羽根戸南古墳群E-4～8号墳（I区）、及び前年度調査区の東側（II区）を発掘調査した。I区の古墳群は、6世紀初頭から後半の円墳群で、各時期1～2基で構成されており、平成9・10年度に調査が実施された羽根戸南古墳群第3次調査とあわせると、4世紀後半の前方後円墳2基の築造以後、ほぼ時期的に途切れることなく、概ね2基ずつ7世紀まで古墳が築造されるという、異色の古墳群であることが分かった。昭和60年度分調査東側のII区では、6世紀後半頃の竪穴住居群が検出された。これはD-1号墳とほぼ同時期であり、同時期の古墳と住居が近接位置にあるという珍しい例である。

調査報告書の作成については、諸般の事情により長い間作成が出来なかったが、昭和58年度調査から30年以上を経過し、ようやく報告書の作成を行うことができた。報告書作成の遅れを陳謝するとともに、改めて関係各機関にお礼を申し上げる。

調査体制

調査原因 飯盛西地区土地改良区

調査主体 福岡市教育委員会

昭和58年度（飯盛西圃場関係第1次調査）

調査実施 福岡市教育委員会文化部文化課

教育長 佐藤善郎 文化課長 生田征生 調査第2係長 折尾学

調査担当 井澤洋一・松村道博

昭和59年度（飯盛西圃場関係第2次調査）

調査担当 井澤洋一・米倉秀紀

昭和60年度（飯盛西圃場関係第3次調査）

文化部埋蔵文化財課 課長 柳田純孝 調査第2係長 飛高憲雄

調査担当 米倉秀紀

昭和61年度（飯盛西圃場関係第4次調査）

文化部埋蔵文化財課 課長 柳田純孝 調査第2係長 飛高憲雄

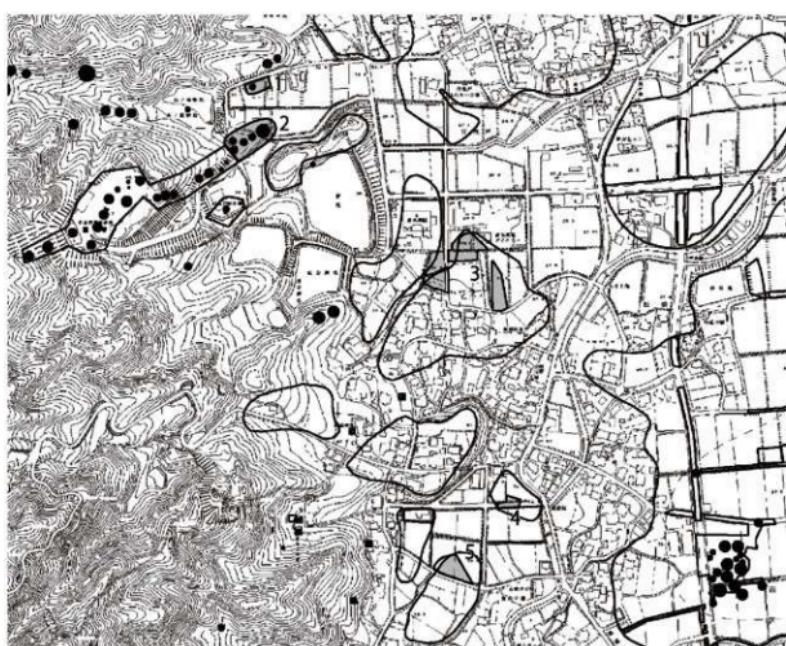
調査担当 山崎龍雄・米倉秀紀

平成27年度 整理報告

経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄 調査第2係長 榎本義嗣

整理担当 米倉秀紀

なお、文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。



1：羽根戸南古墳群D－1号墳（昭和60・61年度調査）

2：羽根戸南古墳群E群（昭和61年度調査） 3：飯盛谷B遺跡（昭和59年度調査）

4：寺ノ上遺跡（昭和58年度調査） 5：牛丸B遺跡（昭和58年度調査）

第1図 飯盛西地区圃場整備関連遺跡位置図（1/7,000）

II 位置と環境

飯盛西地区圃場整備地区は、飯盛山（標高382m）の東麓、標高30～40mの地点にある。丘陵を東に下ると二級河川室見川が流れている。室見川は南の背振山北麓から博多湾に流れ、早良平野を形作っている。この平野部分は旧郡名で言えば早良郡である。

当地区周辺を見ると、飯盛山東麓の丘陵群を東に行くと穏やかな低台地と谷部があり、当地区はこのうち幅の狭い丘陵先端部と低台地から成っている。地区の東側には室見川水系の二級河川日向川が流れ、日向側とさらに東にある二級河川室見川の間は、やや広めの扇状地を成し、日本最古の王墓で著名な吉武高木遺跡が立地している。

飯盛山東側の丘陵上には羽根戸古墳群・羽根戸南古墳群・金武古墳群などの群集墳があり、総基数は300基を超える。その大半は6世紀後半の円墳であるが、小型の前方後円墳3基（羽根戸南古墳群G-2号・同G-3号・同F-2号）を含み、數は少ないながらも古墳時代前期の古墳も含んでいる。扇状地上には吉武高木遺跡をはじめとする弥生時代から古代の遺構・遺物が見つかっている。弥生時代は吉武高木遺跡で特定集団墓が見つかっているほか、多くの妻棺墓が発見され、妻棺ロードとも呼べる妻棺列がある。古墳時代には通称櫛渡古墳（大型帆立貝式）のほか、古墳時代中期前後の古墳群がある。またこの時期の陶質土器・漢式土器が多量に吉武遺跡群から出土しているのも特徴的である。古代には、「寺」銘の墨書き土器・円面鏡・瓦など、寺院址を想起させる遺物群が出土している。

当地区は、丘陵と低台地・谷部を含み、丘陵上には古墳（羽根戸南古墳群）、台地上には生活址・墓地（牛丸B遺跡・寺ノ上遺跡・飯盛谷遺跡）がある。時期別に見ると、弥生時代後期～古墳時代初頭の墓地群（飯盛谷B遺跡）が丘陵端部に占地し、古墳時代住居（牛丸B遺跡・羽根戸南古墳群D-1号の東側）は丘陵端部横の台地上、古代から中世の遺構・遺物は台地上にある。そのほかに、縄文時代遺物（早期・晚期）が羽根戸南古墳群D-1号、E群で散漫的に出土し、E群周辺では古代製鉄関係の遺物も出土している。

上記の内、昭和59年度調査で発掘された弥生時代終末から古墳時代初頭の墓地は、方形周溝墓3基、妻棺墓5基から成る。これらの墓は溝が巡っており、溝の中から舶載方格四神鏡の破鏡が出土し、方形周溝墓からは畿内系石鏡が出土するなど、首長的な人物の墓と目される。平野部からやや奥まった位置に作られているが、このことは、4世紀後半代の2基の小型前方後円墳・すなわち羽根戸南古墳群G-2号・G-3号墳がさらに奥まった地点に築造されていることと考えあわせると興味深く、また吉武高木遺跡以降、早良平野を統括するような墓や古墳は、早良区重畠に所在する拝塚古墳（全長80m前後の前方後円墳）まで出現していないこともあるいは関係するかもしれない。

本書で報告する牛丸B遺跡第1次調査・寺ノ上遺跡第1次調査・羽根戸南古墳群第1次調査の立地・時期・検出遺構や遺物は、いずれも小さな面積の発掘調査であるが、上記のような本地域の特徴を良く表している。



1：藤崎遺跡 2：有田遺跡群 3：吉武高木遺跡 4：野方遺跡
5：錦崎古墳 6：今宿大塚古墳 7：今山遺跡 (□内は P 13 III - 第1図範囲内)

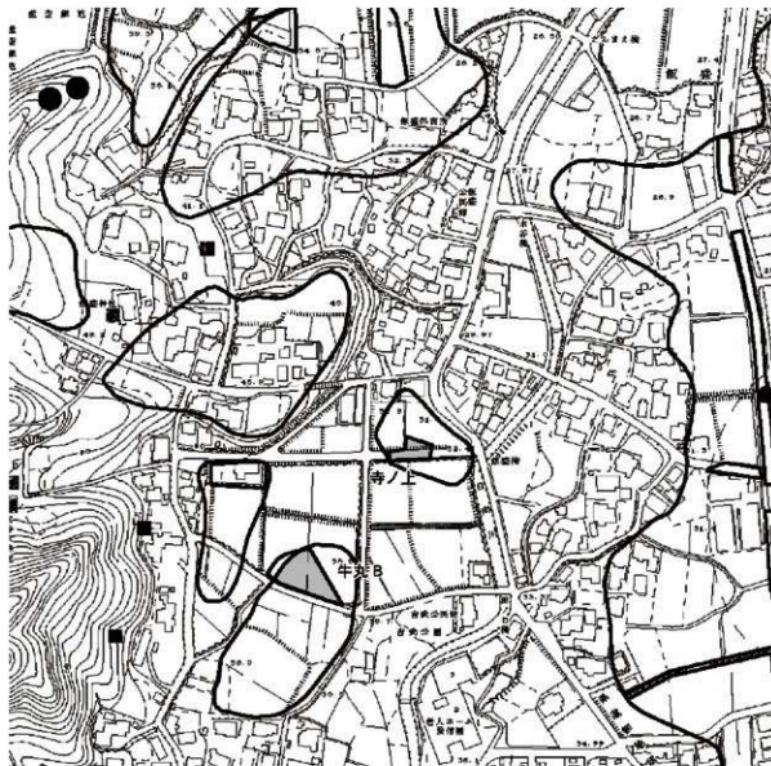
第1図 早良平野北部の主要遺跡位置図 (1/70,000)

III 牛丸B遺跡

1 はじめに

調査は福岡市西区飯盛西地区の面積整備事業に伴って実施した。調査時は事業名を付けて「飯盛西地区面積整備に伴う調査のI区、II区」としていたが、今回の報告にあたり、I区を牛丸B遺跡第1次、II区を寺ノ上遺跡第1次調査とした。調査地点は福岡市西区飯盛字牛丸、字寺ノ上の2ヶ所に分散している。試掘調査は昭和57年に田中寿夫が行い、本調査は井澤洋一、松村道博が担当した。調査期間は牛丸B遺跡を昭和58年11月1日から同年12月2日、寺ノ上遺跡を同年11月20日から12月15日まで実施した。

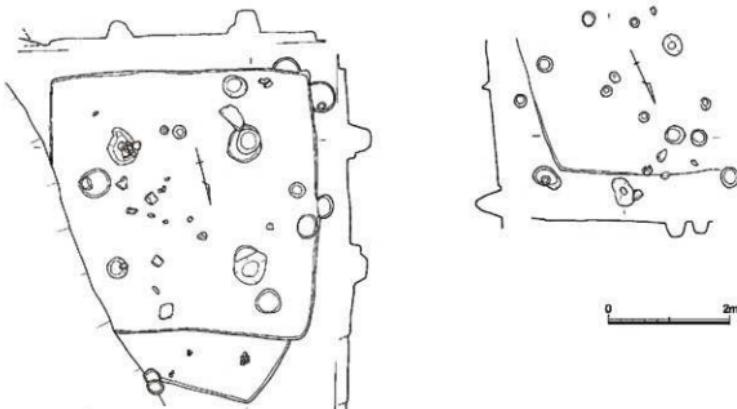
牛丸B遺跡、寺ノ上遺跡は福岡市の南西部に位置する早良平野の付け根に位置する。背振山から派生した山塊の1つに飯盛山がある。そこから東に展開する丘陵の先端部に遺跡は占地する。丘陵は北側に傾斜する斜面



第1図 調査区位置図(1/4,000)



第2図 牛丸B遺跡全体実測図 (1/200)



第3図 竪穴住居跡実測図（1/80）

を階段状に開墾し、棚田となっている。牛丸B遺跡は階段状に造成された水田の中腹、標高36.5m前後に位置し、ほぼ平坦である。寺ノ上遺跡は丘陵裾部の平坦面に位置し、標高31mを測る。飯盛山の麓を北流する日向川の氾濫源にあたる。

2 調査の記録

(1) 調査の概要

圃場整備に伴う調査は田面が造構を削平する場合と道路、水路などの構築物が築かれる時に実施している。今回の調査は試掘調査に基づき、削平される範囲の水田面(牛丸B遺跡、1252m²)および道路建設地(寺ノ上遺跡360m²)の2ヶ所である。

牛丸B遺跡で検出した造構は古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、古代の掘立柱建物3棟、時期が明らかでないピットが多数ある。表土除去時や造構検出時に出土した遺物には弥生時代の扁平片刃石斧や古墳時代～古代末、中世の陶磁器も出土している。

(2) 造構と遺物

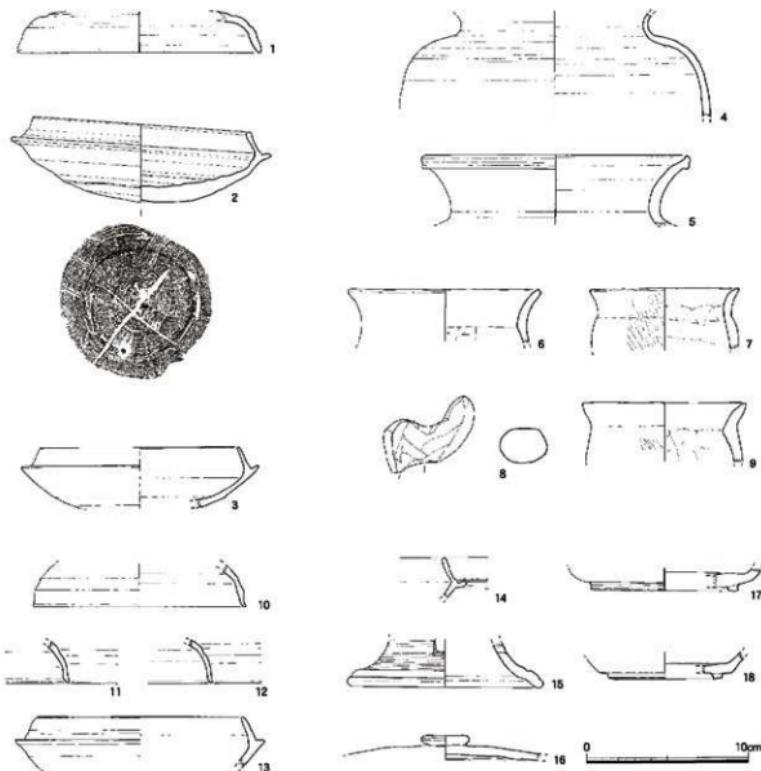
① 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第3図）

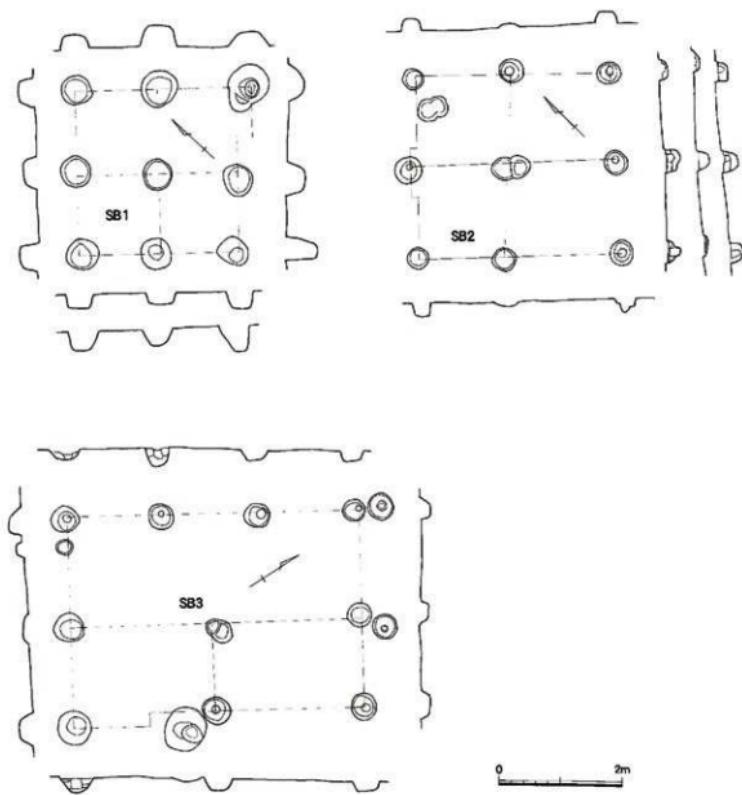
調査区の東寄りの位置にある方形の住居跡で3号竪穴住居跡と北側で切り合っている。遺存状況は悪く、壁高は10cm前後残るだけである。北東隅は擾乱土坑により削平されている。平面形はほぼ隅丸方形を呈する。規模は東西4.32m、南北4.22mを計る。竪は現状では確認できないが、北壁の中程に幅30cm、長さ55cmの範囲に厚さ数センチの焼土と小砾が観察できた。焼土の一部しか残存していないが竪の痕跡の可能性がある。支柱穴と考えられるのはP1～P4で、P1は深さ21cm、P2は同34cm、P3の深さ27cmを測るが、P4は20cmと浅く、4本柱とするには疑問も残る。出土した遺物は覆土のもので、ほとんどは小破片が多い。

出土遺物（第4図）

1～8は床面出上。1～5は須恵器、6・7は土師器の裏である。1は坏蓋で天井部と体部の境が凹線状に窪んでいる。天井部の端にも小さな凹線を巡らす。復元口径14.8cm、残存器高2.5cmを計り、胎土は灰白色を呈し、白色砂粒を少し含む。2は復元口径13.4cm、器高4.7cmを計る。出土壺の中では大型の坏身である。胎土には砂粒を含むが良好で、焼成も良く青灰色を呈する。内面から外面の半分ほどが回転ナデである。底部は厚く、外底面は1/3程が回転ヘラ削りで、底面には「X」の窓印が認められる。3も坏身の口縁部破片である。丸い底部で一部ヘラ削りをしている。口縁部は直線的に内傾し端部は丸く收まる。4は壺の頸部から頸部にかけての破片である。肩が強く張る頸部から頸部がすぼまり、外反する口縁部となろう。頸部外面はヘラ削りの後ナデ調整を施し、頸部内面は回転ナデである。胎土には砂粒を含まず精良で焼成も良く堅緻である。5は壺の頸部から口縁部の破片である。外反する頸部で口唇部の外面は垂直近く立ち上がり肥厚する。焼成は良好で暗灰色を呈する。6・7は土師器の小形壺の口縁部破片である。胎土には

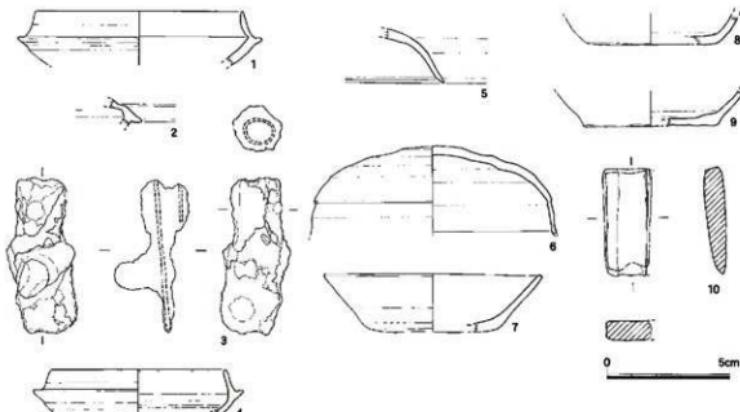


第4図 1・2号整穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第5図 1号～3号掘立柱建物実測図 (1/80)

少量の白色砂粒を含むが焼成は良好で、外面は淡赤褐色、内面は黄褐色である。胴部内面がヘラ削り、口縁部は横ナデ、外面にはヘラナデが残る。7の胎土には白色砂粒を含むが焼成良好で、外面が赤褐色、内面は口縁部が被熱し黒褐色となる。外面は粗い刷毛目調整、胴部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデである。8は甌の把手破片である。9～18は覆土からの出土である。9は土師器の小形の甌、10～18は須恵器の坏と蓋、高坏である。10～12は蓋の口縁部の小破片である。天井部と体部の境は鈍い凹線で区切り、丸く収まる。13・14は坏身の口縁部破片である。13は蓋受けから口縁部にかけて内溝気味に内傾し、14は外反して立ち上がる。15は高坏脚部で長方形の透かしが認められる。16は坏蓋の天井部破片である。天井部の中央に扁平な描みを貼り付ける。焼成はあまり良好ではなく、灰白色を呈す。



第6図 ピット出土遺物実測図 (1/3,1/2)

2号竪穴住居跡 (第3図)

調査区南端の東寄りに位置する住居跡である。住居跡の南西部のコーナー部を検出したが、鈍角な形状を示し竪穴住居跡ではない可能性もある。遺構の残り具合は非常に悪く、最も残りの良い南西隅でも数センチを測るに過ぎない。主柱穴、竈も明らかではない。

出土遺物 (第4図-17・18)

高台付窓の底部が2点出土しているが小さな破片で、住居跡の時期を表しているのか疑問である。17は土師器の坏で低い高台を張り付ける。18は須恵器の坏で低い高台を貼り付け、底部と体部の境に横線を有する。

3号竪穴住居跡 (第3図)

1号住居跡の北側に位置し、大部分は1号住居跡と重複し、北隅のコーナーの一部しか遺存していない。全体の様相は明らかではないが、平面形は方形ないし長方形を呈するものであろう。壁高は僅か数センチしかなく、主柱穴、竈も不明である。出土遺物は須恵器、土師器の粗片が出土しているが時期を確定できる遺物はない。

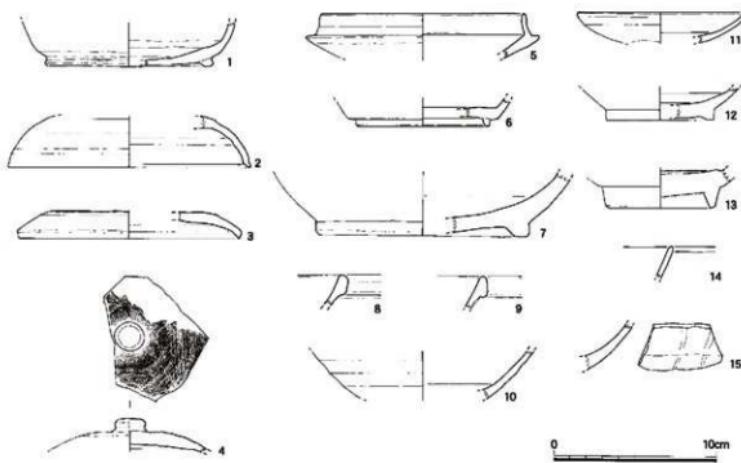
② 挖立柱建物

調査区の北東端に3棟並んで検出した。主軸の方向は各々建物毎に異なり、統一性に欠ける。2間×3間の側柱建物1棟と2間×2間の総柱建物2棟である。いずれも柱穴は小さく、円～椭円形で、規模は計40cm前後、柱痕も15cm程度と小規模の建物群である。

1号掘立柱建物 (第3図)

調査区の北西端に位置し、主軸をN 44° Wにとる2間×2間の総柱建物である。柱穴の掘方は小形で円形～椭円形で、直径が40cm～60cm、深さ22cm～43cmを測る。P 9の柱筋が通らないが他は規則的な配置である。柱痕跡はP 9で唯一確認できた。柱間の距離はP 1-P 2は143cm、P 2-P 3は128cm、P 1-P 4は128cm、P 4-P 7は138cm、P 8-P 9は154cmである。

出土遺物 (第6図-1～3)



第7図 包含層・表土出土遺物実測図（1/3）

1はP 1出土の須恵器環の口縁部破片である。口縁部は緩く外反しつつ、内傾して立ち上がる。2はP 7出土の須恵器環蓋の小破片である。体部は扁平で体部は低く、屈曲して口縁部となる。3はP 1出土の鍛造鉄斧である。全体が鋒に覆われ不明な点が多い。基部の袋部は両方から折り曲げられ、断面は梢円形をなす。刃部は幅3.4cm、長さ4.9cm、全長8.3cm、厚さは4mm前後である。

2号掘立柱建物（第3図）

1号掘立柱建物の東3mに位置し、主軸をN 43° Wにとる2間×2間の総柱建物である。柱穴間の距離が各々異なり、全体的に歪な建物である。柱穴の掘方は平面形が小形の円形で、直径40cm前後、深さ5cm～25cmの浅い掘り込みである。P 2、P 4、P 5は柱筋が通らなく、各々の中間距離も138cmから189cmと不規則である。P 2とP 5を除いて柱痕が確認できた。柱間の距離はP 1～P 2は138cm、P 2～P 3は189cm、P 1～P 4は150cm、P 5～P 7は175cm、P 8～P 9は153cm、P 9～P 10は161cmを測る。

3号掘立柱建物（第3図）

2号掘立柱建物の東2mに位置し、主軸をN 30° Eにとる2間×3間の側柱建物である。柱穴間の距離が異なったり、柱筋が通らなかつたり、東側の柱は中に1本あつたりと全体に歪な建物である。柱穴の掘方は平面形がほぼ円形で直径40cm～55cm、深さ10cm～55cmである。柱間距離はP 5～P 6が143cm、P 6～P 11が243cmを測る。他の柱間距離も145cm～243cmとかなり数値のバラつきがある。柱痕はP 2、P 3、P 5、P 10を除いて確認でき、直径20cm前後の柱を用いたようである。出土遺物はないがその時期は明確ではないが、他の建物と同時期と考えられる。

③ ピット出土土器（第6図-4～10）

4～6は須恵器である。4はIV期の环身で受け部から口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く收まる。体部に回転ヘラ削りが一部残る。他は回転横ナデ調整を施す。S P 55出土。5はⅢ期の环蓋の小破片で、口径

は不明である。天井部と体部の境は不明瞭で丸く収まる。口唇部内面には浅い段を有する。SP47出土。6はⅢA期の坏蓋の須恵器である。天井部外面は大部分が回転ヘラ削りで、口縁部から天井部脇にかけて回転横ナデである。口縁部と体部の境は明瞭な段を有し、口唇部内面にも明瞭な段を有する。焼成堅緻で灰白色を呈する。SP111出土。7・9は底部ヘラ切の坏である。底部脇は面取りされ、丸味を帯び、体部は直線的に開き、端部は丸く収まる。胎土には砂粒を少し含むが精良で淡橙色をなす。7はSP192出土で径13.2cm、器高7.8cmを計る。9も同様の坏でSP63からの出土である。8は平底の土師器の坏で底部との境は丸く収まる。体部は内湾気味に立ち上がる。焼成は悪く、黄灰色を呈し、調整は摩耗のため不明である。SP47出土。10は扁平片刃石斧である。中央から縱方向に割れている。幅2.0cm、全長4.3cm、厚さ0.8cmを測る。SP137出土。

④ その他の出土遺物（第7図）

表土掘削時、遺構検出時に出土した遺物である。1～6は須恵器の坏蓋、坏身、高台付坏である。1はⅧ世紀代の高台付坏である。低い高台を底部縁に貼り付け、「ハ」の字状となり、底部と疊付けが同一高となる。2はⅢB期の坏蓋である。丸い天井部から内湾して口縁部となり、その境は不明瞭、口唇部内面は浅く畠み、稜をもつ。3は扁平な坏蓋で、端部を折り曲げ、口唇部をとがらせる。4は蓋でボタン状の摘みをもつ。天井部外面にはカキ目状の調整を行なう。5はⅣ期の坏で蓋受け部から外反して垂直に口縁部は立ち上がる。内外面とも回転横ナデで復元口径14.2cmを計る。6は1と同じ高台付坏である。高台は細く底部縁より内側に貼り付け、高台の幅は均一ではなく3～6cmを測る。7は須恵器質の高台付鉢である。胎土には白色砂粒を僅かに含むが精良で、焼成はよく堅緻である。貼り付け高台は外面を垂直に、内面を斜めに削る。内底面は使用により滑らかになっている。8～15は中国製の輸入陶磁器類である。8～13は白磁である。8・9はⅣ類の白磁の口縁部である。口縁部を肥厚させ玉縁となる。釉は白灰色ないし緑灰色、胎土は白灰色である。12はⅣ類の碗底部で外面の体部下半から底部まで露胎のままである。内底面と体部の境には段を有する。10はⅥ類の白磁碗の体部破片。11はⅡ類の皿、外面底部近くは露胎である。13はⅨ類の白磁碗の底部。内底面は白灰色の釉がかけられ、高台脇から高台内面まで露胎である。14は同安窯系、青磁の露口縁部、15は竜泉窯系青磁の碗である。外面に蓮弁文をヘラ描きしている。他に黄釉陶器の盤が1点出土している。内面に鉄絵を描き、外面は口縁部を除き露胎のままである。

3 小結

今回の調査では古墳時代後期の方形竪穴住居跡3軒、古代の掘立柱建物3棟、時期不明の柱穴多数を検出した。遺構の広がりは西側にはこれ以上は広がらず、また北側にもさほど広く展開するとは考えにくく、今回調査した地点より東、南側に遺跡の中心が展開するものであろう。今回は遺跡の北西端部を調査したものであろう。遺構は散発的なあり方を示し、出土遺物には古墳時代、古代、中世までの遺物を含んでいるが、その量は少なく小破片である。遺構は古墳時代と古代に限られる。調査したのは遺跡の一部と考えられ、遺構、遺物の遺存も悪く、遺跡の全体は明らかではないが、小規模で単発的に經營された集落であろう。

IV 寺ノ上遺跡

1 はじめに

寺ノ上遺跡は牛丸B遺跡の北150mにあり、牛丸B遺跡と同一丘陵裾部に位置し、標高31.4mを測る。丘陵部から扇状地への変換点にあたり、東側を日向川が南西から北東に流れ、当該地はその氾濫原にあたる。調査時は飯盛西地区II区としていたが今回の報告では寺ノ上遺跡第1次調査とする。調査地は福岡市西区飯盛字寺ノ上、調査期間は昭和58年11月20日から同年12月15日まで実施した。試掘調査は前年度に田中壽夫が行い、発掘調査は井澤洋一、松村道博が担当した。

2 調査の記録

(1) 調査の概要

今回調査を実施したのは農道になる部分であり、田面部は発掘調査を実施していない。検出した遺構は河川氾濫原に位置し、砂礫層に掘り込まれた古代末～中世にかけての溝・溝状遺構3条だけである。氾濫原に位置するため流出したものか、本来的に遺構が少なかったものであるか明らかではないが、調査区の南西隅のピット数個以外の遺構はない。

(2) 遺構と遺物

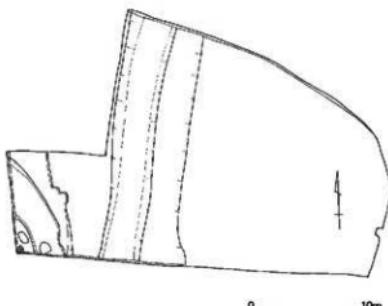
① 溝・溝状遺構

1号溝状遺構（第1図）

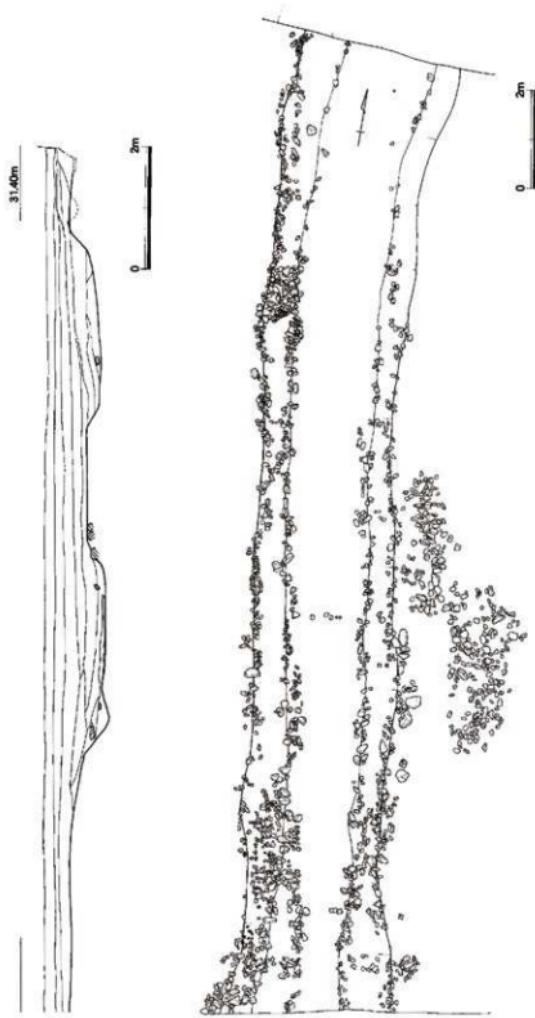
1号溝状遺構は調査区の西半分に広がり、2号、3号溝の上層に横たわる包含層状の遺構である。幅10.3m、深さ20cm前後を測る。覆土は黒褐色砂質土、茶褐色砂質土に灰白色土が混じった土層である。明確な掘り込みを平面的には確認できない事や遺物が散漫的にしか出土しないことなどから川状遺構の氾濫原に堆積した包含層とした方が適当かもしれない。

出土遺物（第3図）

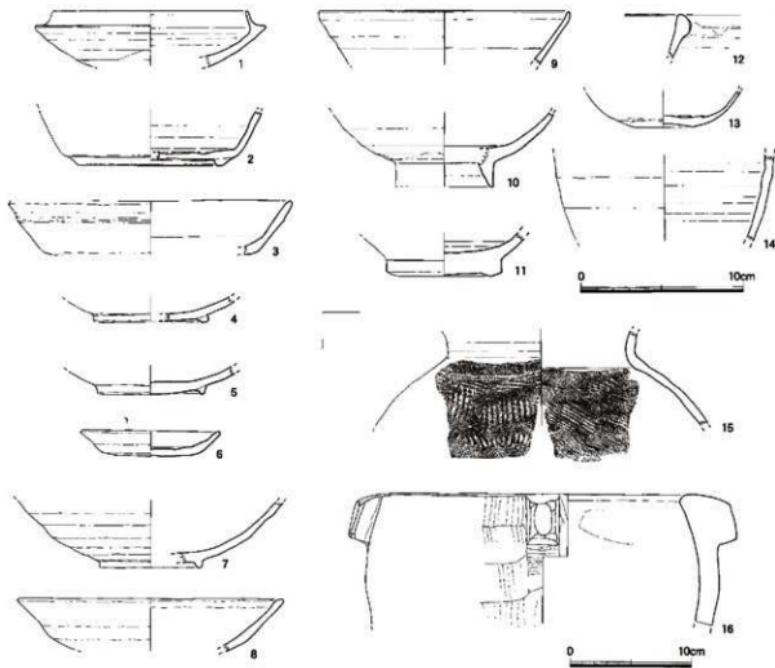
1は須恵器で环身の口縁部破片である。口径14.0cm、残存器高3.4cmを測り、色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。2は須恵器で低い高台をヘラ切後貼り付け、高台脇は丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的に開く。内外面とも回転ナデである。3は土師器環の体部破片である。平底の底部で体部は直線的に開き、端部は丸く收まる。胎土は良く、淡黄白色を呈する。4・5は底部に、低く細い高台を張り付けた上師器の环



第1図 寺ノ上遺跡全体測量図 (1/400)

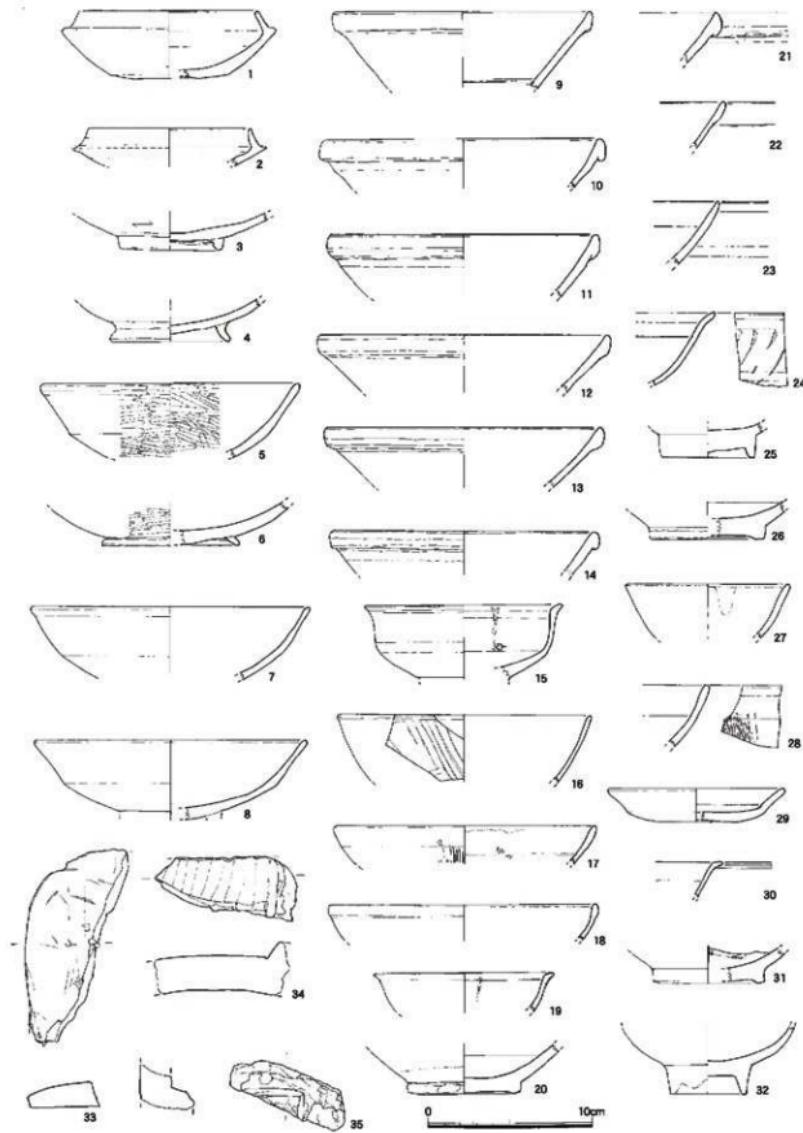


第2図 1・2号溝及び調査区南壁土層実測図 (1/100,1/80)



第3図 1号溝出土遺物実測図（1/3,1/4）

である。6は底部ヘラ切離しの土師器の皿である。1／4程度の残りで口径8.4cm、器高1.4cmを計る。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。7・8は瓦器碗である。7は内面研磨、外面ナデ調整で、色調は灰白色である。8は口縁部の縁の内外面が黒変している。9～14は中国製陶磁器である。9はIX類の白磁碗である。胎土は白灰色で、釉は緑帯びた白灰色を薄く施す。10はVI類の碗で高台から体部にかけての破片である。高台脇から高台内面まで露胎である。11・12はIV類の白磁碗底部と口縁部破片である。11は底部破片で内面は白緑色の釉を施し、外表面は露胎、胎土は白灰色である。12は玉縁の口縁部破片で、薄い緑灰色の釉が厚く重ねている。13は器壁が薄く見込みに輪線を巡らす白磁の皿で、釉は緑灰色、胎土は白灰色である。14は灰緑色の陶器瓶の胴部破片である。15は土師器の壺で、頸部から頸部の破片である。胴部外面には頸部近くまで刷毛目が残り、その上から平行叩き調整を行う。胴部内面は斜め方向の粗い刷毛目調整で、頸部から胴部外面までナデ調整を行う。16は滑石製石鍋の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に縱長の長方形に把手を削り出している。基部の幅1.7cm、長さ4.2cm、厚さ1.6cmの方柱状を示す。口径は30cmに復元され、口縁部から内湾する胴部となる。胴部外面には幅3cm前後の豊頃が4段残る。内面は使用のためか平滑になる。



第4図 2号溝上・中層出土遺物実測図 (1/3)

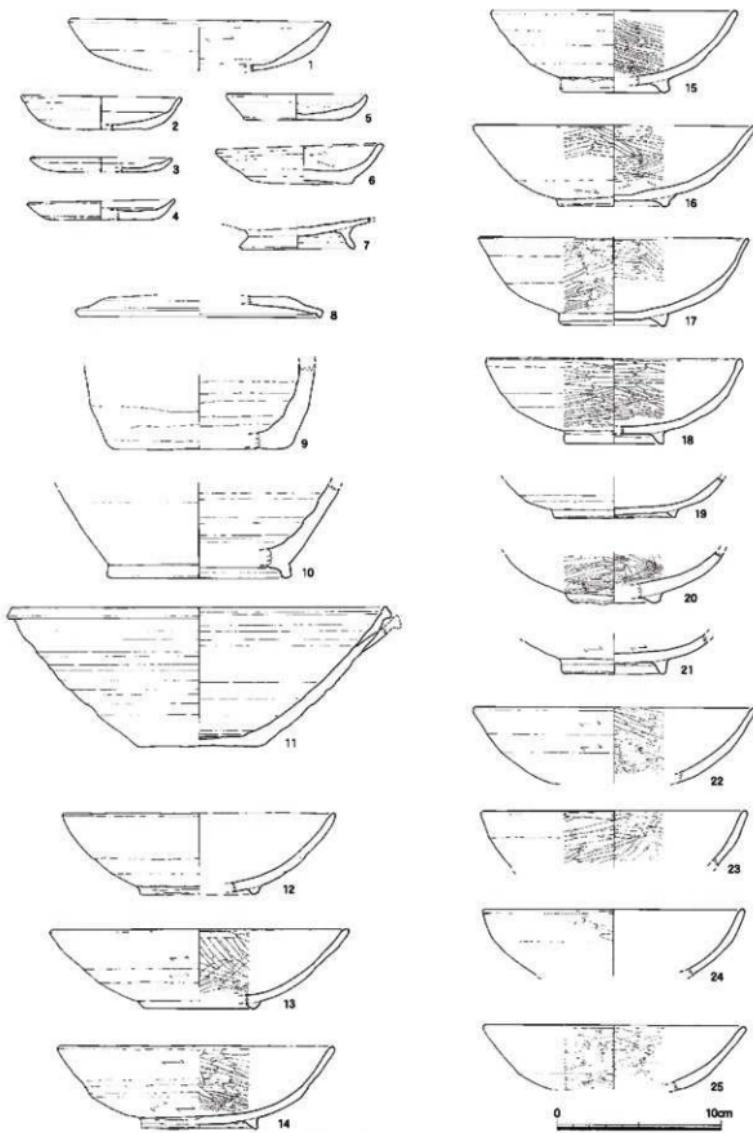
2号溝状遺構（第2図）

調査区の少し西寄りに位置する南北に延びる溝で、上層は1号溝状遺構と重なる。ほぼ南北方向に延び、その規模は南端幅3.2m、深さ42cm、中間で幅2.75m、深さ34.3cm、北端で幅3.4m、深さ38cm、全長20mを測る。覆土は6層が暗褐色砂質土で3号溝状遺構の上まで広がる。7層が暗褐色土と茶褐色土が混じり合った砂質土、その下にはきめ細かい砂層、粗砂層が堆積している。遺物は6・7層の岸寄りでの出土が多い。完形品に近いものや破片も半分以上が残っているなど遺存状態もよく、器表面はさほど磨滅を受けておらず、遠くから流されて堆積したものではなく、近隣の生活領域から遺棄されたものであろう。

出土遺物（第4～6図）

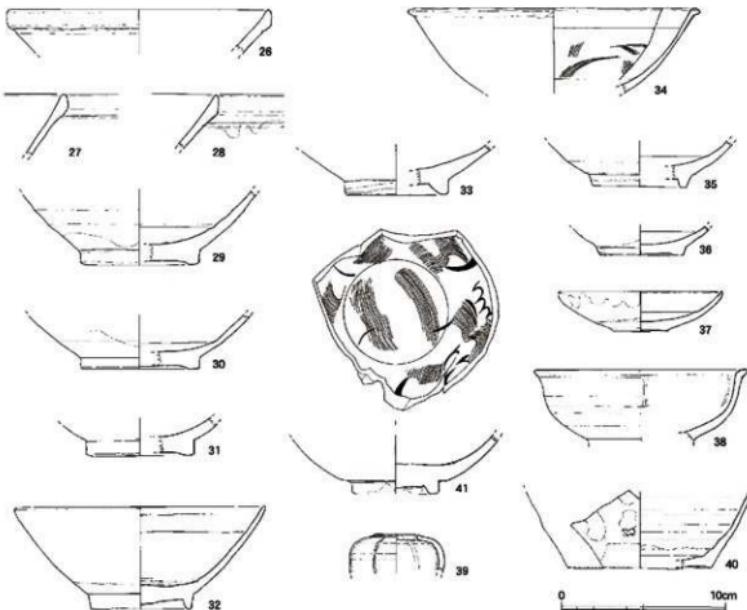
第4図1～33は上層・中層出土の土器類である。1はIV期の須恵器环身で口径10.9cm、器高4.1cmで、底部は回転ヘラケズリを行い、口縁部から内底面は回転ナデ調整である。2は須恵器の环身の小破片である。环身は浅く、口縁部は外反して立ち上がる。3・4は土師器の高台付环の底部破片である。3は高台の貼り付けが雑で环部との接合面が悪く、高台の中ほどで折れ曲がっている部分がみられる。5～8は瓦器碗である。5は焼成良く、硬く焼き締まり、黒褐色の外面から、内面は灰白色で口縁部から1cm幅で吸炭処理をしている。6は低い高台を貼り付けた底部破片で、外面をヘラ研磨している。焼成良好色調は灰白色である。8は高台が接合部で剥れている。焼成が悪く軟質であり、調整は不明。外面は白灰色、ないし灰褐色で、内面は黒褐色となる。9～15、26～32は輸入陶磁器で白磁、青磁である。9～15・26・31はIV類の碗で胎土は白灰色で、釉は淡緑灰色ないし白灰色である。外面にはピンホールが目立つ。21・30はIV類の底部で、外面は高台脇から底部は露胎である。30の内底には重ね焼きの痕が残る。16は白磁の小碗で口径12.0cm、残存高4.6cmを計る。丸い底部から体部は真直ぐ立ち上がり、口縁部を少し肥厚させ端部を丸く收める。釉は淡緑灰色、胎土には少し砂が混じる。体部内面に白推線を入れ口縁部を輪花とする。17・28は同安窯系青磁碗である。17は外面の口縁下をヘラで瘤ませ、その下に斜行する幅広の模様を描く。28は櫛歯状の模様を描く。18はII類の白磁碗で口縁部が小さな玉縁になる。胎土は緻密で淡灰色、釉は淡緑黄褐色であるが、被熱で表面が荒れ、釉が剥離している。19は口径11cmを測る白磁の小碗である。縁を帯びた白灰色の釉で、胎土も白灰色である。内面に白推線を描く。21は口縁部を幅広に肥厚させたII～3類の白磁碗で緑灰色の釉、白灰色の胎土である。23はIX類の白磁碗で、釉は緑灰色で胎土には砂が混じる。24はVI類の白磁碗で外面に細い竪で模様を描く。27は口禿の白磁小碗で口径10.0cmを計る。釉は緑を帯びた淡灰色で、胎土は砂混りで灰白色である。口唇部は内外面とも角張り、釉を拭きとる。31はIV類碗の高台部で釉は緑を帯びた灰白色で、胎土も灰白色である。高台径4.6cm、高さ1.7cmを測る。高台外面の一部から高台内面にかけて露胎のままである。33～35は滑石製品で石鍋の転用品であろう。ただ煤は付着していない。33は扁平な小判形を成す板状製品で中央部が厚く、縁が厚くなる。両面とも平滑に仕上げている。中央部に一孔を穿つ。34は石硯と思われ一側に縁を削り出し、身の部分を7mm程彫りこぼめる。裏面は内湾しており鍋の内側と推測される。35は石鍋の外面を利用し、一面を長方形に削り出しつまみ状に成形している。

第5・6図は溝の下層出土の遺物である。1～7は土師器の环、皿である。1は丸底の环で、内外面ともナデにより平滑に仕上げる。口唇部内面を強くなで、少しくぼませる。2は小皿で底部には簾状压痕が残るが底部切り離しは不明。3は小皿で底部はヘラ切である。4も小皿であるが底部糸切りで、口径9.0cm、器高1.25cmである。5は口径8.6cm、器高1.6cmを計る小皿で少し分厚い。6は口径10.2cm、器高2.5cmの底部糸切りの小皿である。7は貼り付け高台付环である。高台は「ノ」の字に開き底部外面に貼り付け痕が跡に残る。8～10は須恵器である。8は环蓋で平坦な天井部から端部を折り曲げている。回転ヨコナデで調整している。9は瓶頸の底部破片である。内面には轉轂目が残り、高台脇にはヘラケズリの跡が残る。10は高台付環の底部破片である。焼成堅緻で器表面は白灰色で、内部は茶褐色である。ほぼ直立する低い高台で安定感のある底部



第5図 2号溝下層出土遺物実測図1 (1/3)

となる。内面には輪轤目が残り、外面の高台脇はヘラケズリの後ナデ調整をしている。11は東播系擂鉢である。口径10.4cm、器高11.3cmを測る。胎土には少し大きめの小石を含むが、焼成堅緻である。内面の底部から体部にかけて使用痕がみられる。外底面は切り離し痕をヘラでナデ消す。体部の内外面には輪轤目が残る。口縁部の外面には1cm~3cmの幅で黒褐色に変色し、重ね焼きの痕跡が残る。12は土師器の高台付椀で、口径16.6cm、器高4.95cmを測り低い高台を張り付ける。色調は淡黄褐色を呈し、器表面は摩耗して調整は不明である。13~25は瓦器椀である。15、21を除き、断面三角形の低い高台を貼り付けている。13は口径13.2cm、器高4.8cmを測る。焼成は良好である。色調は内面が黒褐色、外面は1~2cm幅で黒変し、他は白灰色を呈し、粘土の接合痕が残る。14は焼成が良好で、色調は黒褐色、内底面だけが高台の円形状に黄白色となる。外面の上半部は荒い研磨を施す。15は焼成が悪く、軟質で黄灰色を呈す。内面は丁寧な研磨であるが、外面はナデ調整である。18は特に焼成がよく硬く焼しちらっている。内外面とも粗い研磨である。19~21は体部から高台にかけての破片、22~25は体部から口縁部の破片である。26~39は中国製輸入陶磁器の白磁破片である。26~31はIV類の碗である。釉は緑灰褐色ないし黄褐色を帯びた白灰色が多く、胎土も白灰色から灰黃白色である。高台脇から底部は露胎である。32はIX類の碗で口径15.3cm、器高6.2cmを測る。内面の口縁部下に2条の沈線が刻まれ、見込みは輪状に釉を描き取る。釉は淡い緑灰色で胎土は白灰色である。33はII類の碗底部である。釉は淡緑灰褐色、胎土は白黄灰褐色で外底部から高台にかけて露胎である。34はVII類の碗で底部を欠損する。釉は白灰色、胎土も白灰色である。口縁部上端を水平に削り、端部は丸く收める。35はV、VI

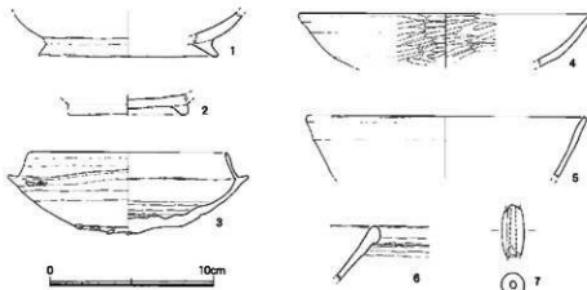


第6図 2号溝下層出土遺物実測図2 (1/3)

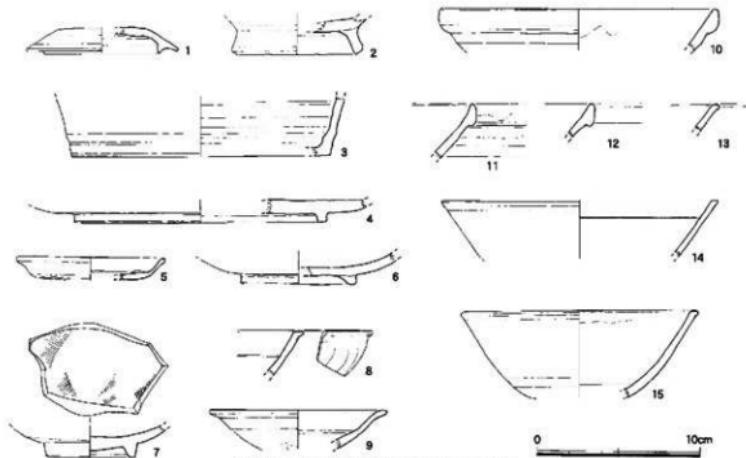
類の碗底部であろう。高台部から底部は露胎である。36はⅢ類の皿で、淡緑灰色釉で高台脇から底部は露胎である。37は皿で口径10.0cm、器高2.4cmを測り、底部脇から底部は露胎である。釉は黄灰褐色、胎土は白灰色である。38は小碗で口径13.0cm、残存高4.35cmを測る。丸みのある底部から体部は内湾し、口縁部は強く外反、端部は丸く收まる。体部内面に白推線が認められる。釉は少し緑を帯びた白灰色で、胎土は白灰色で砂粒を含む。40は黄釉陶器の底部破片である。41は竜泉窯系青磁碗IV類である。釉は緑灰色の透明釉で、全面に施釉し疊付と高台内面の釉を搔きとる。内面にヘラ、櫛状工具による曲線状の浅い模様を描く。

3号溝状遺構（第1図）

幅3m強、深さ20cm～30cm、長さ6m以上を測る。2号溝状遺構と異なり、直線的ではなく湾曲して南から北西方向へ延びる。覆土は13層が黒～茶褐色砂質土、14層は灰白色砂層、15層は暗褐色砂質土である。溝



第7図 3号溝出土遺物実測図（1/3）



第8図 包含層出土遺物実測図（1/3）

の肩部が不明瞭で、人工的な造構と考えるよりも自然の河川とした方が妥当性があろう。出土遺物は上層から少量が出土している。

出土遺物（第7図）

1は土師器の高台付椀の高台から底部の破片である。2は瓦器椀で高台から底部にかけての破片である。3は須恵器の壺で口径12.0cm、器高4.96cmを測る。底部には自然釉が垂れ、口縁部は焼き歪がみられる。この溝の床面に掘り込まれた土坑状造構からの検出で、古墳時代後期の土坑の可能性が強い。4は瓦器椀の口縁部破片である。体部中ほどに稜を持つ。内外面とも研磨。5は中国製の白磁碗の口縁部破片、胎土は白色、釉は灰白色である。7は下層出土の土鉢である。長さ3.2cm、最大径1.4cm、胎土には砂粒を多く含む。

② 包含層出土遺物（第8図）

造構検出時に出土した遺物についてここで報告する。古代から中世までの遺物がある。1は須恵器の壺蓋、3は平底で壺類の底部、2は土師器の底部から高台にかけての破片、4は高台付須恵器の盤で焼成はよく赤褐色を呈する。5は底部がヘラ切の土師器、6は高台付瓦器碗である。7～15は中国製磁器で白磁の碗、皿類である。7はVII類の碗、高台は低くて小さく、釉は薄い緑灰色、外面にピンホールがある。胎土は白灰色で少し砂が混じる。見込みに櫛歯文を描く。8はVII類の口縁部破片である。口縁部上面を水平に切り、外面の口縁部直下をナデにより窪ませ口唇部をとがらせる。外面の体部にヘラ書き文を描く。釉は緑を帯びる白灰色。胎土は淡黄灰色である。9はIV類の皿で釉は薄い緑灰色、胎土は白灰色である。10～12はIV類の碗である。釉は白灰色、胎土は淡灰色である。口縁部には釉垂が認められる。

3 小結

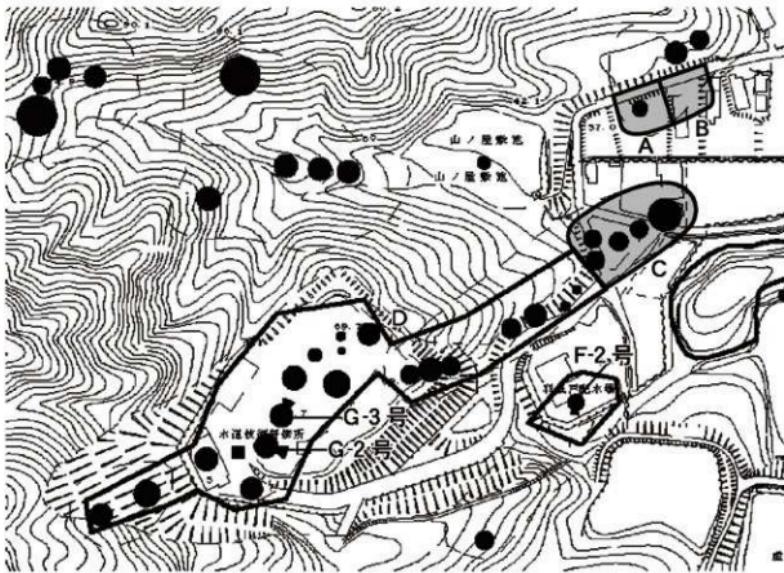
今回の調査では溝・溝状造構が検出された。出土遺物は底部ヘラ切の土師器の壺や瓦器碗や須恵器と中国製白磁類が主体である。僅ながら青磁も出土している。時期的には11世紀～12世紀の時期が考えられる。明確な造構は2号溝だけである。幅2.75mの直線的に走る溝であるが、その性格は明らかではない。遺物にはあまり摩耗がみられないことから近隣からの投棄等が推測される。屋敷に付随する溝の可能性がある。

V 羽根戸南古墳群 D-1号墳

1はじめに

羽根戸南古墳群は、早良区大字羽根戸に所在する。古墳群はA群からH群まで総数40基以上から成り、標高382mの飯盛山麓から東に派生する小丘陵群上に作られている。そのうち、飯盛西地区圃場整備に伴って2度の発掘調査が行われた。第1次調査は昭和60年度にD-1号墳の発掘調査（本報告・飯盛西地区圃場第3次調査）、第2次調査は、昭和61年度にE-4～8号墳（飯盛西地区圃場第4次調査）の発掘調査を行った。平成9・10年度には、羽根戸配水池建設に伴って第3次調査が行われ、E-1～3・9～12号墳・F-2号墳・G-1～11号墳・H-1・2号墳の調査を行った（福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集「羽根戸南古墳群」）。同調査では小型の前方後円墳3基を含む4世紀後半から7世紀に渡る古墳20基の古墳群を完掘し、3度の調査によってE群・G群・H群は現存しない。

今回報告するD群は3基の古墳から成り、上記第2次調査・第3次調査を行った丘陵とは100m弱挟んだ北側に位置する。2号墳・3号墳は尾根の南斜面上にあり、今回報告するD-1号墳は東西に走る尾根を南側に



第1図 羽根戸南古墳群位置図（現在の分布地図）

A：昭和60年度調査区（本報告） B・C：昭和61年度調査区

D：羽根戸南古墳群第3次調査（平成9・10年度）

G-2号・G-3号：前期前方後円墳 F-2号：後期前方後円墳

降りた小平地上に立地している。主体部はすでに盜掘されており、天井石もほとんどなく、墳丘も大きく壊されている状態であった。

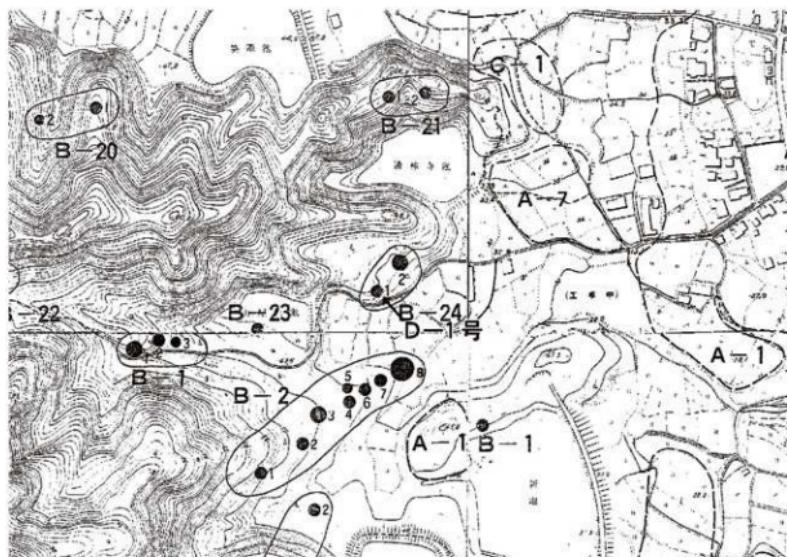
発掘調査は昭和61年1月23日に現況測量から開始した。測量と同時に墳丘に3本のトレンチを入れたが、トレンチに小石室の小口がかかり、小口部分を壊してしまった。トレンチ掘削後、石室内の埋土除去、墳丘遺存面までの掘り下げ、周溝・墓道の掘り下げを行ったが、その過程で土坑等古墳以外の遺構を確認し、掘り下げを行った。墳丘遺存面での測量・石室実測終了後、墳丘を除去し、地山面まで掘り下げ、地山面での地形測量後、同年3月4日に調査を終了した。

検出した遺構は横穴式石室を主体部とする円墳1基で、この円墳には小石室1基もある。他に溝2条、土坑11基（近代以降も含む）である。古墳からは古墳時代遺物の他、中世・近世・近代の遺物が出土したが、特に中世の土師皿の出土が多い。他の遺構からの出土遺物は少なく、古墳時代・中世の遺物が少量出土した。他に織文時代の土器・石器が少量出土した。

2 D-1号墳

(1) 現況(第3図、図版5・6)

D-1号墳が所在する地点は樹林地で、伐採以前は、樹木の間に古墳が垣間見える状態であった。古墳はすでに盜掘を受け、墳丘・石室ともに一部破壊を受けている。天井石のほとんどと石室石材の多くが無く、墳丘も石室部分が大きく陥没している状態であった。全体としてかろうじて墳丘盛土は円墳の形状を保っているが、墳丘の最も高い部分が篠道端部あたりにある。石室下部と思われる石材もすでに露出していた。



第2図 羽根戸南古墳群D-1号墳位置図(圃場整備以前の分布地図)

(2) 墳丘(第4~7図、図版7・14)

墳丘は地表面の整形ラインも含めて改変が著しく、正確な墳丘規模は判然としない。地山整形時の測量図(第7図)を見ても、溝や大型の土坑など古墳時代以後の遺構や擾乱によって当初の地山整形を保っている部分は一部しかない。石室規模や外護列石の位置から復元すると、古墳の直径は概ね15m前後を測ると思われる。墳丘頂部付近もかなり荒らされており、中世以降現代までの遺物が墳丘内上部に包含されていた。石室破壊時などに土を大きく移動させているものと思われる。

盛土は花崗岩パイラン土である黄褐色土系の土が大半を占める。もっとも残りの良い北側トレーニチでは厚さ20~80cm前後の厚さで版築を行っている。石室の掘方は断面では明瞭ではなかった。

石室前面両側には外護列石がある。石室正面に向かって左側は概ね3段の石を積んでいる。羨道部の側壁とは続いているが、本来は羨道部から続いていたものと思われる。向かって右側の石列は羨道部側壁から続き、徐々に高さを下げて、最後の5石は1段のみ積んでいる。外護列石というよりは墓道の壁と理解できる。墳丘内及び墳丘裾部から环・高环を中心とする古墳時代の須恵器の他、中世の遺物が出土したが、原位置を保っていたと考えられるものはほとんどない。

(3) 石室(第8~10図、図版8~13)

主体部は单室の横穴式石室である。これとは別に墳丘北側斜面に小石室が1基あった。横穴式石室は真西から15°北側に触れて開口している。平地側ではなく、尾根側に開口している。玄室部は遺存状況が悪い。玄室奥壁は倒れて残存せず、玄室の他の壁も腰石とその上の1石が残っている程度であった。また玄室南側壁は、腰石とその上の1石も大きく石室内部に傾いており、平面実測後に倒れて崩壊し、立面図が作成できなかつた。羨道部は比較的残りが良く、天井石も1石が架かっている状態で残存していた。また羨道部内の閉塞石は良好な遺存状況であった。

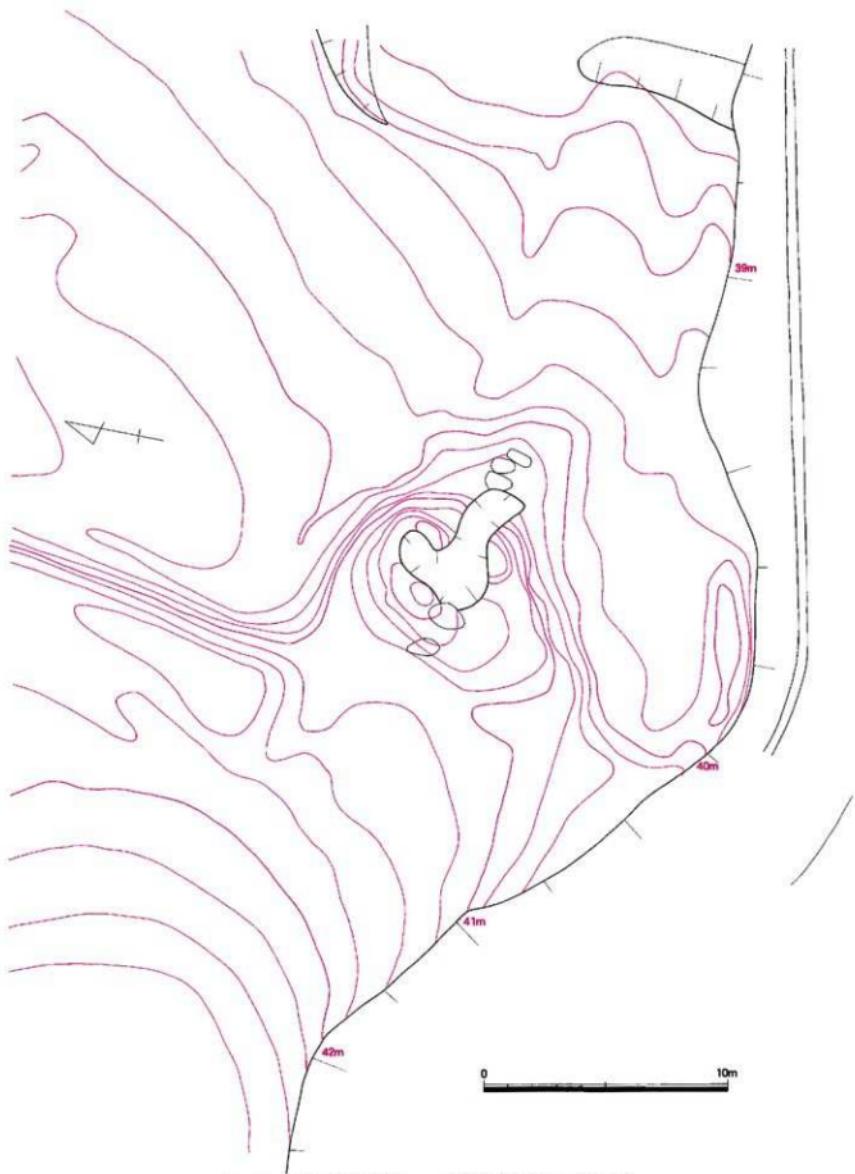
石室は両袖单室で、奥壁は倒れていたが、倒れていた石の基部の位置と掘方から石室の規模は概ねわかる。玄室の長さ3.5m前後、幅2.3m前後を測る。腰石は両側石が長さ1.5m前後、高さ80~90cm前後の石2石、奥壁が高さ1.5m前後の1石である。框石は大きな石を斜めに埋め込んでいる。床面は大半が破壊され、床面直上の副葬品はほぼ無い。古墳時代遺物は少なく、須恵器・土師器の破片、鉄器50点前後、玉類は2点のみで、いずれも原位置をとどめていない。また玄室埋土から中世の土師器皿や青白磁合子蓋が出土した。土師器皿は完形品で、口縁部の一端が焼け焦げて煤が付着しているものが多い。

羨道部からそのまま墓道へつながるが、羨道部内の閉塞石が切れている少し先、羨道部幅が概ね同じ部分までを羨道部とすると、長さ4.2m前後を測る。唯一天井石が残っている部分の床面からの高さ1.25mを測る。床面は框石を境に玄室より30cmほど高い。壁面に使っている石は、玄室側長さ1m前後の大振りな石を用い、入口側に行くほど小振りの石を用いている。

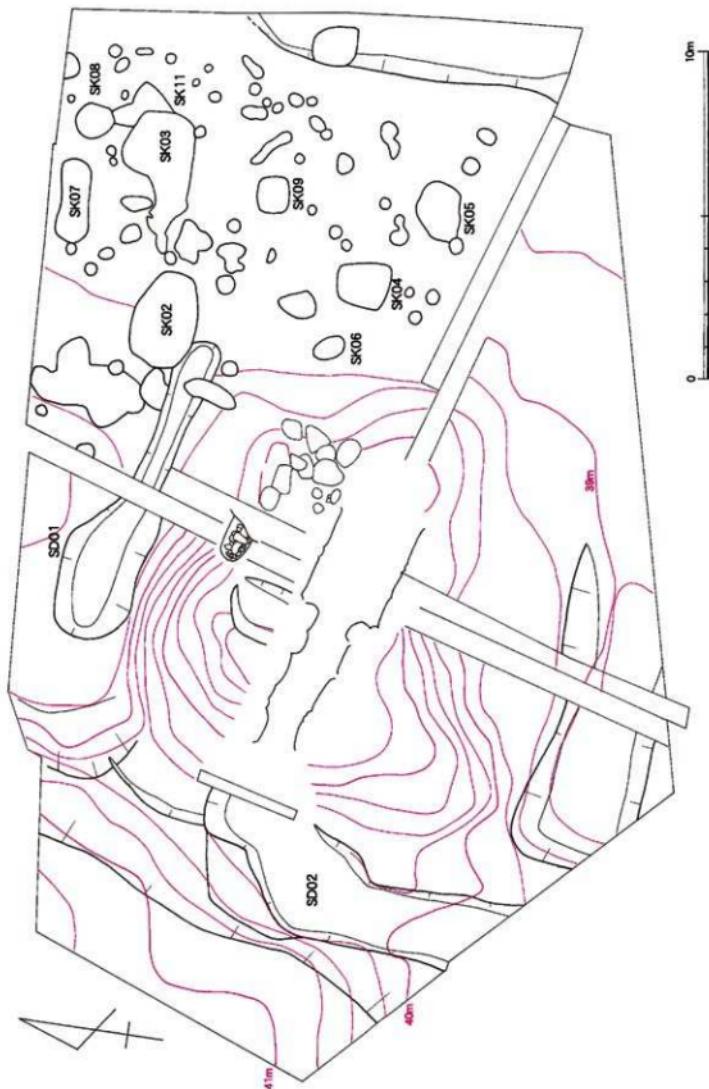
羨道部のほぼ全面に閉塞石が充てんされている。羨道部中央付近に高さ50cmほどの石が立っており、そこから玄室側は高さ60cm前後で上面が崩っている。中央石から入口側は高さ1m以上積んでいるが、その途中に長さ1m近い大石を据えており、このような状況から少なくとも3度にわたる閉塞の積み直しがあったものと考えられるが、面として把握することはできなかった。羨道部からの出土遺物はあまり多くなく、かつ完形品はない。

(4) 墓道

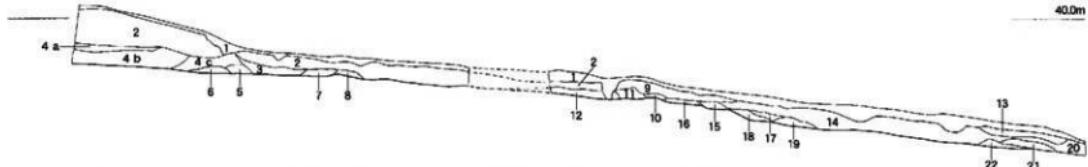
羨道部からそのまま壁面が広がり、墓道へ移行する。石室前面部分から浅い溝状(SD02)を呈している。石室が丘陵側に開口し、石室前面から丘陵斜面になるため、墓道は石室を直角に折れ曲がるように作られてい



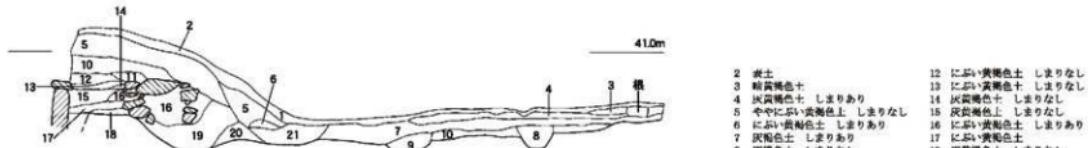
第3図 羽根戸南古墳群D-1号墳現況測量図（1/200）



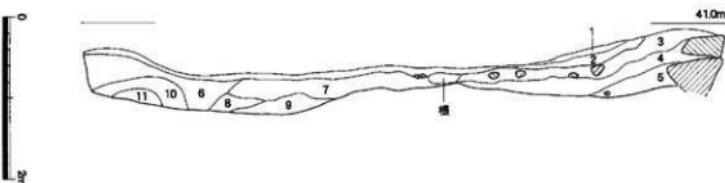
第4図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘遺存面測量図 (1/150)



- | | | | |
|----------------------|------------------|------------------|------------------|
| 1 土 | 5 黄褐色土 しまりあり | 11 灰褐色土 しまりなし | 17 灰褐色土 しまりなし |
| 2 灰褐色土 | 6 棕褐色土 | 12 にぶい黄褐色土 しまりあり | 18 にぶい黄褐色土 しまりあり |
| 3 棕褐色土 | 7 黄褐色土上 しまりあり | 13 灰褐色土上 しまりあり | 19 灰褐色土上 しまりあり |
| 4 a 棕褐色土上 しまりなし | 8 にぶい黄褐色土上 しまりあり | 14 灰褐色土上 しまりあり | 20 棕褐色土上 しまりなし |
| 4 b にぶい黄褐色土 *よりやや明るい | 9 灰褐色土 しまりなし | 15 にぶい黄褐色土 しまりあり | 21 灰褐色土 しまりなし |
| 4 c 墓室地盤土 しまりなし | 10 灰褐色土 しまりあり | 16 灰褐色土 しまりなし | 22 未記載色土 しまりあり |

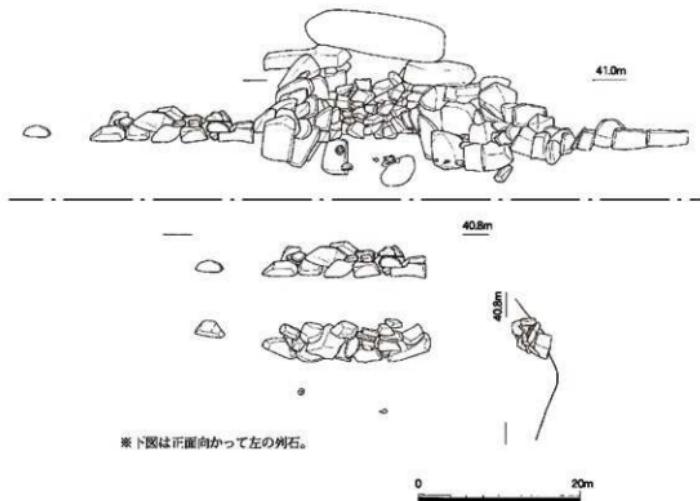


- | | |
|--------------------|------------------|
| 2 土 | 12 にぶい黄褐色土 しまりなし |
| 3 黄褐色土 | 13 にぶい黄褐色土 しまりなし |
| 4 灰褐色土 しまりあり | 14 灰褐色土 しまりなし |
| 5 ややにぶい黄褐色土上 しまりなし | 15 灰褐色土上 しまりなし |
| 6 にぶい黄褐色土 しまりあり | 16 にぶい黄褐色土 しまりなし |
| 7 灰褐色土 しまりあり | 17 にぶい黄褐色土 |
| 8 灰褐色土 しまりなし | 18 灰褐色土 しまりなし |
| 9 墓室地盤土 しまりなし | 19 黄褐色土 しまりあり |
| 10 ややにぶい黄褐色土 しまりなし | 20 灰褐色土 しまりあり |
| 11 にぶい黄褐色土 しまりなし | 21 黑褐色土上 しまりあり |

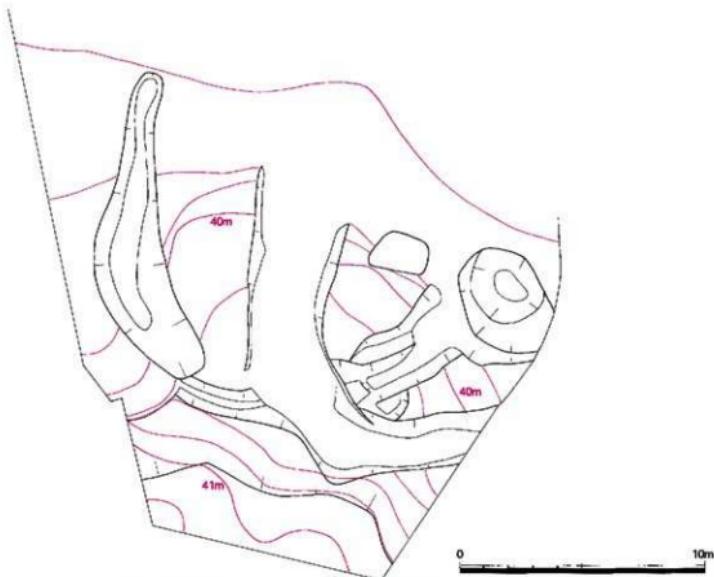


- | | |
|------------------|---------------|
| 1 黄褐色土 | 7 にぶい黄褐色土 |
| 2 墓室地盤土 しまりなし | 8 墓室地盤土 しまりあり |
| 3 にぶい黄褐色土上 しまりなし | 9 墓室地盤土 |
| 4 墓室地盤土 しまりあり | 10 黑褐色土 しまりあり |
| 5 墓室地盤土 しまりあり | 11 灰褐色土 しまりあり |
| 6 灰褐色土 | |

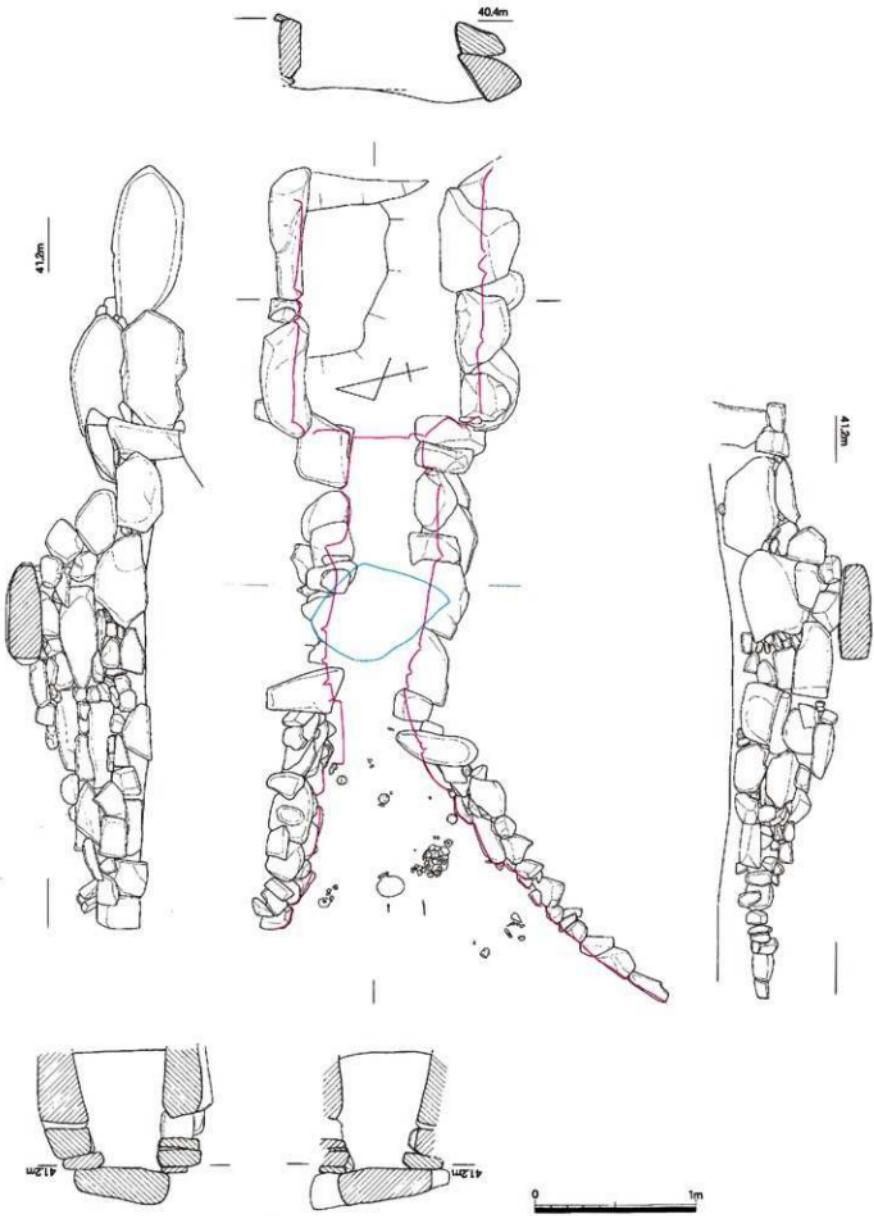
第5図 羽根戸南古墳群D-1号古墳丘土層断面図 (1/60)



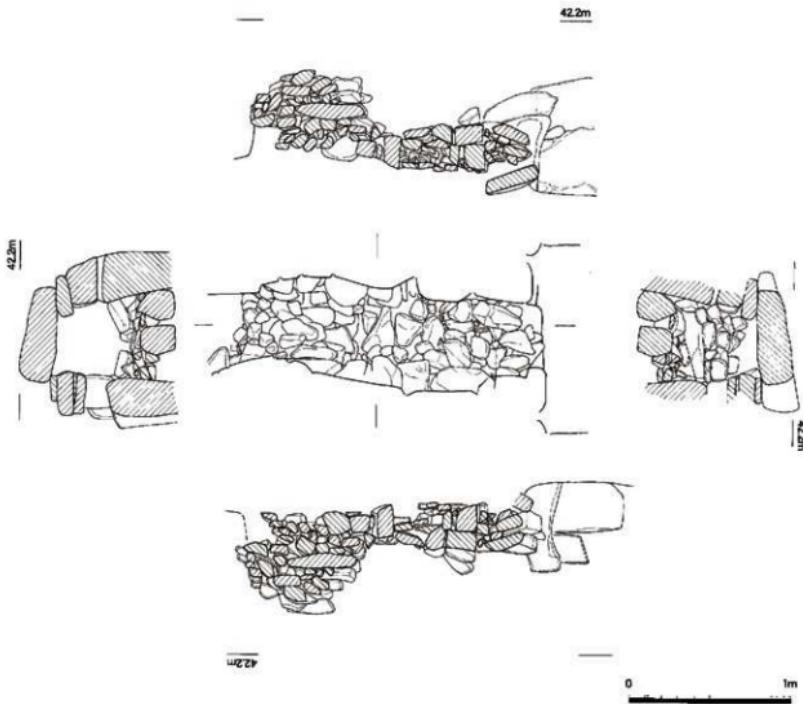
第6図 羽根戸南古墳群D-1号墳外護列石実測図 (1/60)



第7図 羽根戸南古墳群D-1号墳地山整形実測図 (1/200)



第8図 羽根戸南古墳群D-1号墳石室実測図(1/60)

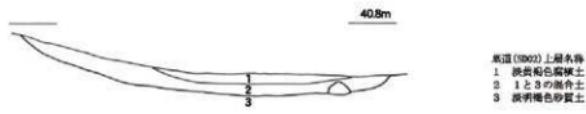
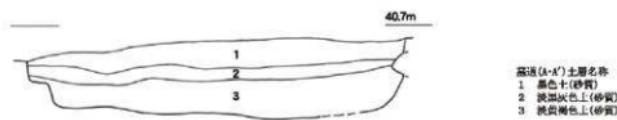
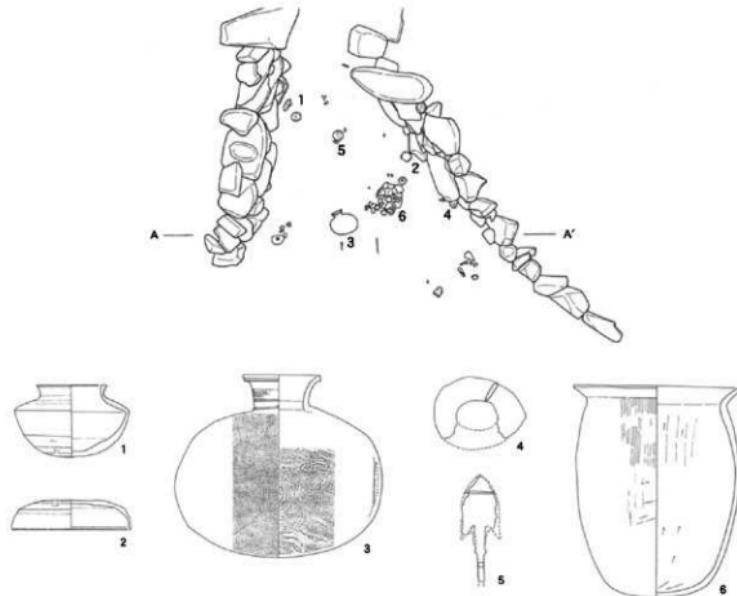


第9図 羽根戸南古墳群D-1号墳閉塞石実測図(1/60)

る。墓道部端から5mほどは東側に石を1段おいて壁面としている。墓道はさらに調査区外へと伸びている。墓道からは最も多く遺物が出土している。また完形品も多く、その多くが原位置もしくはそれに近い位置と考えられる。そのほとんどが古墳時代の須恵器である。壺・高壺の他、大型器台・平瓶なども出土した。また土師器が数点、鉄滓が数点出土した。古代の土器も数点出土している。

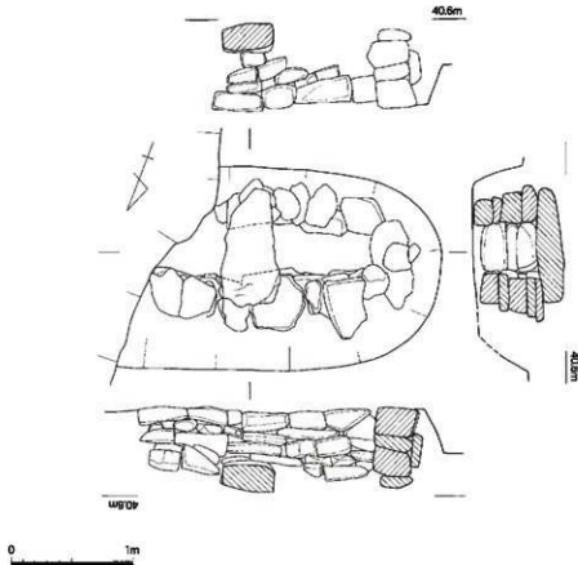
(5) 小石室(第11図、図版15)

前述のように墳丘北側トレンチを掘削中に小石室を検出したが、東側小口部と天井石1石を掘削によって破壊してしまった。また石室西側は墳丘上部からの擾乱によって天井石と壁体の一部が取り除かれている。両側壁はやや薄めの石材を小口積みにし、小口部はやや厚めの石材を横長に積んでいる。内法で長さ2m前後、幅40cm前後、高さ40cm前後を測る。副葬品は無い。小石室を発見したトレンチの土層断面(第5図)を見ると、小石室の下は地山を斜めに掘り下げ、一度土を盛った後、さらに持った土を少し掘り下げて壁体を構築している。横穴式石室側は壁体を構築しながら同時に墳丘の土も持っていること、小石室の上の盛土は上からの古墳全体の盛土と一緒にであることから、この小石室が古墳築造当初から予定されていたもので、古墳築造時に同時に作ったことは明瞭である。



0 1m

第10図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道遺物出土状況実測図(1/60)
及び墓道土層断面図(1/60)



第11図 羽根戸南古墳群D-1号墳小石室実測図（1/40）

(6) 古墳出土遺物

① 墳丘出土遺物（第12～14図、図版21：22）

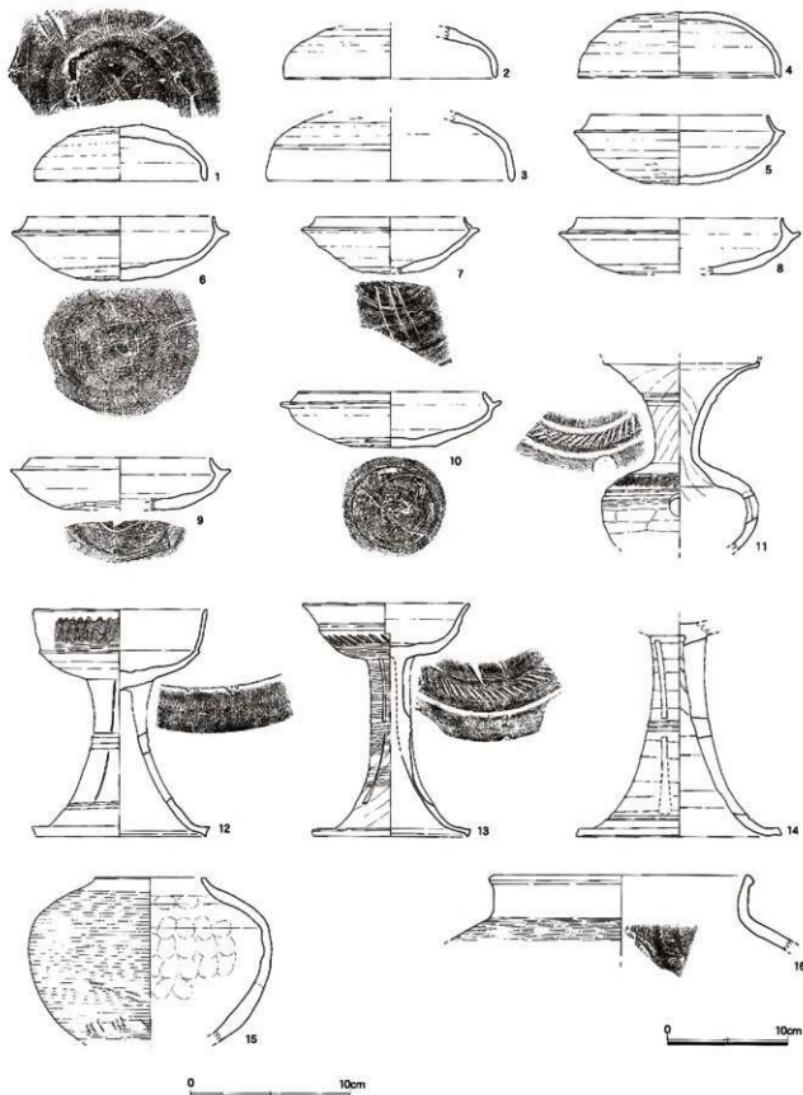
墳丘は前述のように後世に荒らされており、本来古墳に伴った遺物の他、古代・中世・近世・近代の各遺物が出土している。出土した古墳時代遺物も完形品は無い。従って古墳時代遺物で原位置を保っている遺物はほぼ無いと考えられる。

1～23は墳丘上・墳丘上の擾乱及び墳丘内から出土した遺物である。1～4は須恵器の坏蓋である。トレンチや墳丘擾乱から出土している。1は口径10.7cm、2・4は口径13cm前後、3は口径15.2cmを測る。1～3は口縁部端を丸く作っているが、4は口縁内面をヘラで削り面取している。また1の天井部には「升」状のヘラ記号がある。

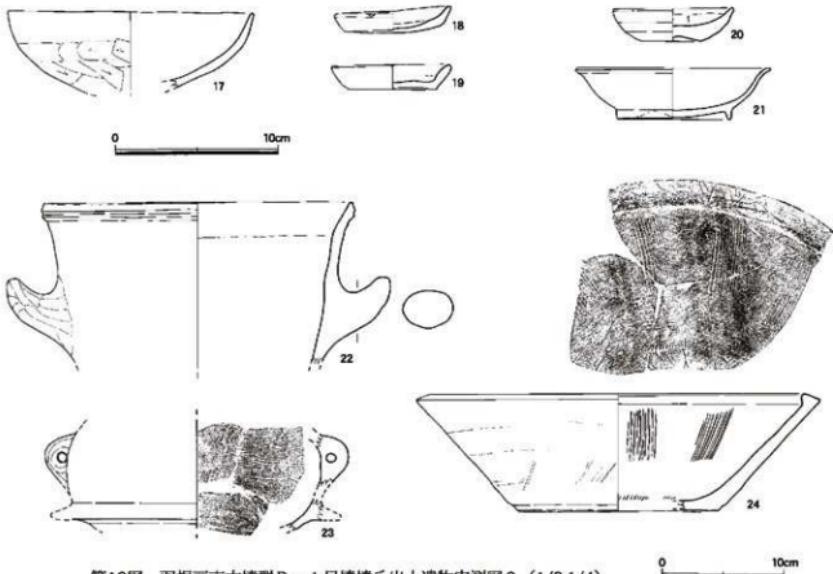
5～10は須恵器の坏身である。トレンチ・墳丘擾乱・墳丘表土層から出土している。口径は7が9cm強、5・6・9・10が11cm大、8が約13cmである。器高は7～10が3.5cm前後、5・6が4cm強である。5は全体的に丸みのある体部で、8～10は平底に近い。6・7・9・10の外底部にヘラ記号がある。

11は須恵器の罐で、墳頂部で出土した。推定口径10cm前後を測る。胴肩部に2本の沈線間に櫛歯文を施している。12～14は須恵器の高环である。3点とも墳頂部で出土した。12は口径10.8cm、器高14.1cm、13は口径10.4cm、器高14.4cmを測る。14は脚が12・13より高い。12は坏部外面に櫛による波状文、13は櫛による押圧文を施している。15は須恵器の無頸壺。口径6.8cm、推定器高約11cmを測る。外面は全面カキ目、内面は指頭ナデで仕上げている。墳丘表土から出土。

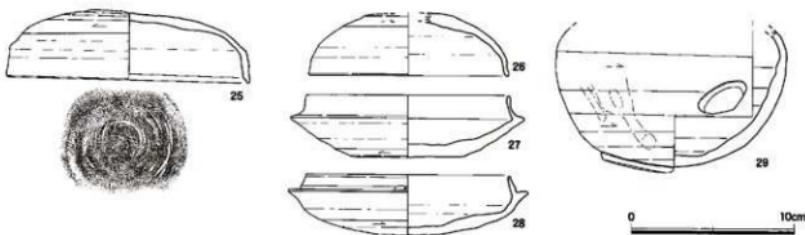
17～24は須恵器以外で、古墳時代以後の遺物を含んでいる。17は土師器の壺で口径15cmを測る。体部外下部はヘラ削りで仕上げている。他はナデ調整である。墳丘上擾乱から出土した。18・19は糸切りの土師器皿で、墳丘表土・擾乱から出土。18は口径7.2cm、器高1.2cm、19は口径7.4cm、器高1.5cmを測る。18



第12図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘出土遺物実測図1 (1/3,1/4)



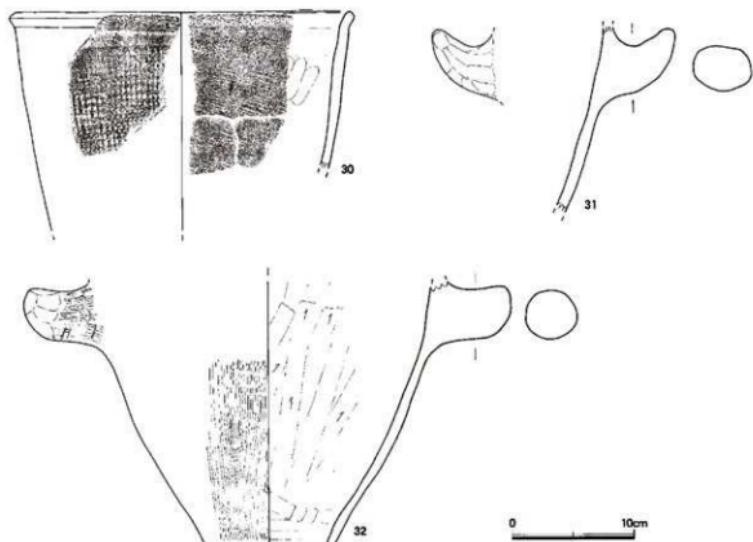
第13図 羽根戸南古墳群D-1号墳埴丘出土遺物実測図2 (1/3,1/4)



第14図 羽根戸南古墳群D-1号墳埴丘基部出土遺物実測図1 (1/3)

も口縁端部の一部に煤が付着し焦げている。20は陶器の皿で、埴丘表土から出土。口径7.4cm、器高2.1cmを測る。素地の色は淡褐色で見込みに緑褐色の釉を施している。21は白磁の皿で端反りの口縁部を有している。口径12cm、器高3.1cmを測る。白色の半透明釉で、北トレンチ内で出土した。22は土師器の把手付甌もしくは瓶である。口径25.2cmを測る。両面ともほぼナデ仕上げである。埴丘攪乱内で出土した。23は土師質の釜で埴丘表土から出土した。内面はハケメで仕上げている。埴丘表土出土。24は土師質のすり鉢である。目は9本で、各目の単位間は3~4cm前後空いている。口径33cm、器高9.6cmを測る。

25~29は埴丘基部から出土した。25・26は須恵器坏蓋である。埴丘前面近くの埴丘基部埋土出土。25は口径14.9cm、器高4.2cmを測り、口縁端部内面をヘラで面取りしている。内面にロクロ整形時の痕跡が沈線状に残っている。26は口径12.2cm、器高3.8cmを測る。27・28は須恵器坏身で27は埴丘前面基部、28は埴丘後



第15図 羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘裾部出土遺物実測図2(1/4)

面裾部で出土した。27は口径12.6cm、器高3.8cmを測る。口縁部は外反し、底部は平底に近い。28は口径12.5cm、器高3.7cmを測る。口縁部の立ち上がりは墳丘出土のものに比べて長く、垂直に近く立ち上がっている。29は須恵器壺で墳丘前面裾部から出土した。胴下部に焼成後に穿孔が施されている。墳丘裾部前面近くで出土。

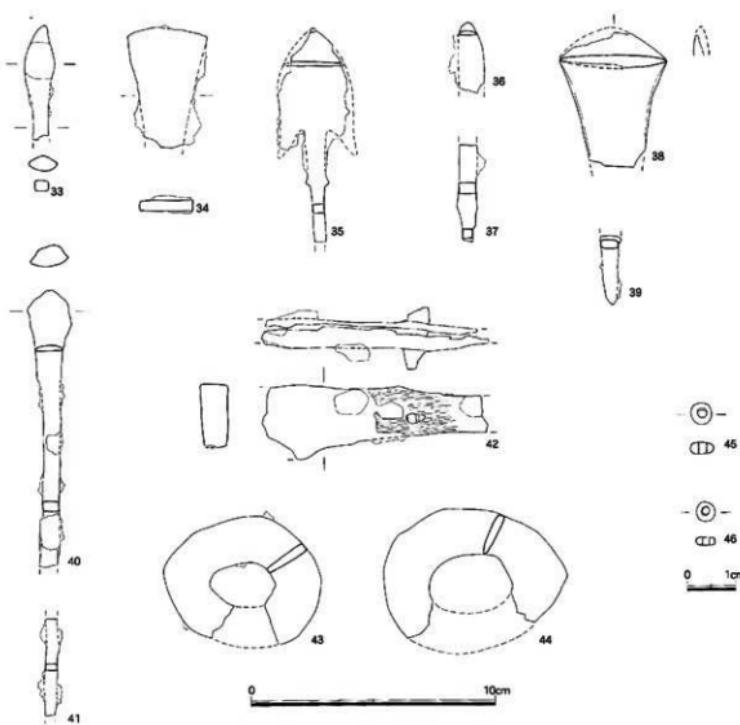
30~32は土師器の壺である。いずれも墳丘前面近くの裾部で出土した。30は外面に格子目タタキを施し、内面は遺存状況が悪いが、平行の文様の当て真痕と思われる。口径28.3cmを測る。31は30と同一個体と思われる。32は底径10.4cmを測る。外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げている。

②出土鉄器・玉類（第16図、図版22）

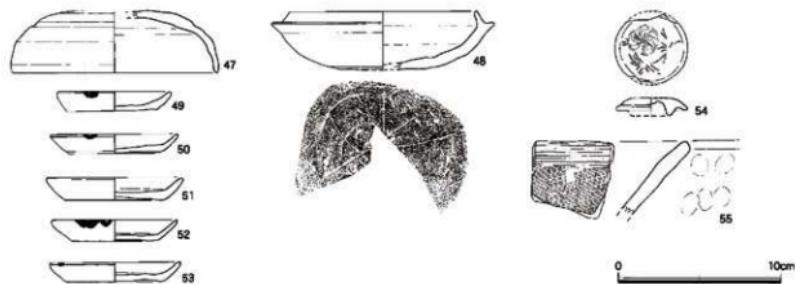
石室内外から鉄器が出土したが、量はさほど多くなく、さらには出土から30年の間に錆化が進み、破損したものも少なくない。また出土した多くがカクランされた土の中からの出土で、石室前面や墳丘から出土した鉄器も本来は石室内にあった可能性が高いことから、ここでまとめて報告する。

出土した鉄器の内、器種がわかるものは鉄鏃・鉄刀のみである。鉄鏃は破片数で30種で最も多いが、多くが小さな破片で、図として掲載したのは9片である。鉄刀は本体が3片、锷が2片である。この他に器種不明が約20点ある。この時期の古墳で多く出土する鉄滓は5点が出土したのみである。

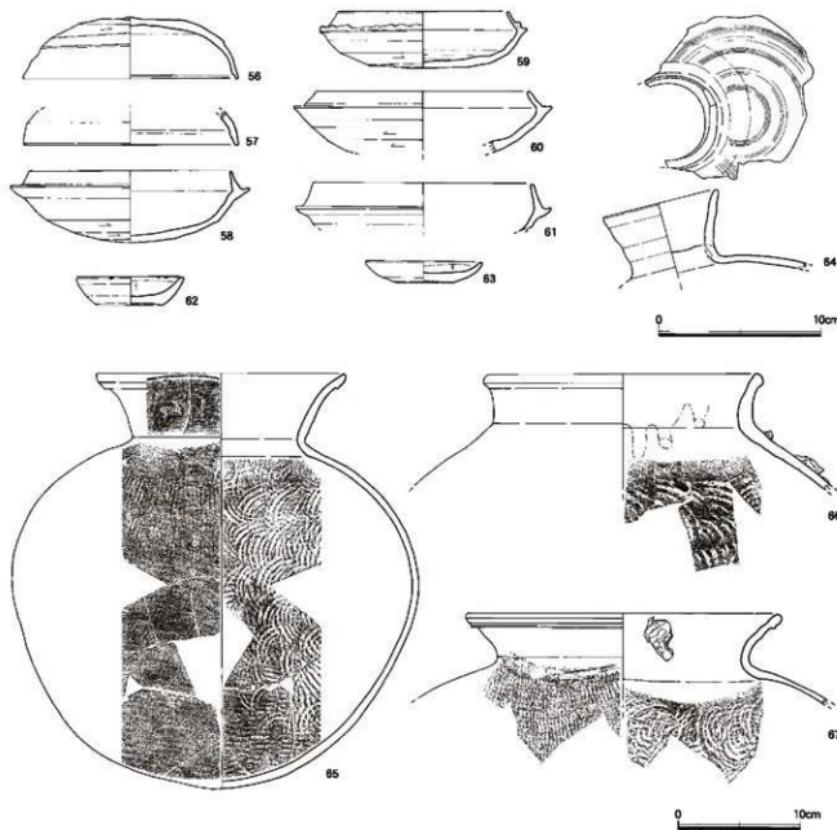
33~41は鉄鏃である。36と37、38と39、40と41は同じビニール袋に入っており、取り合上げ時に同一個体と考えたものである。33は墳丘トレンチで、38・39は外護列石前面、36・37・40・41は玄室、34は羨道部、35は墓道で出土した。34は先端部が若干欠けており、圭頭式であるものと思われる。35は逆剣を有している。36は片刃であろうか。38は圭頭式である。42は鉄刀の茎から身にかかる部分である。莖部には釘が残っている。43・44は锷と考えられる。43は長径6.5cm、短径5cm強、44は長径7.5cm、短径6cm前後を測



第16図 羽根戸南古墳群D-1号墳出土鐵器・玉類実測図（1/2）



第17図 羽根戸南古墳群D-1号墳玄室出土遺物実測図（1/3）



第18図 羽根戸南古墳群D-1号墳羨道出土遺物実測図（1/3,1/4）

る。43は埴丘裾部、44は墓道から出土した。45・46はガラス玉である。45は外径4mm、46は3.5mmで、ともに濃い目のスカイブルーを呈する。

③玄室出土遺物（第17図、図版22）

玄室は大きく荒らされており、原位置をとどめる遺物はほぼ皆無であった。また古墳時代遺物は少なく、中世期の遺物が出土している。47は須恵器の壺蓋で、口径12.4cm、器高3.8cmを測る。48は須恵器壺身で、口径11.4cm、器高3.5cmを測る。外面にヘラ記号がある。49～53は土師器の皿で糸切り底である。最も小さい49が口径7.0cm、最も大きい51が8.4cmを測る。5点の内51を除いて口縁部端の一部が焦げて煤が付着している。54は青白磁の合子蓋で、口径4.4cmを測る。釉調はやや青みを帯びた白色で、天井部浮き彫りの草花文を描いている。55は土師質の土鍋片である。

④ 羨道出土遺物（第18図、図版22・23）

羨道部には何度も積みなおされた閉塞石が多量にあり、出土遺物はさほど多くなく、しかもそのほとんどが後世に入ってきた土の中から出土したもので、床面から出土したものはほぼ皆無である。また羨道部出土の破片と墓道出土の破片が接合したものが多く、羨道部で割れた破片を、後世の人が羨道部に投げ出した可能性が高いものと思われる。56・57は須恵器の环蓋で、56は口縁端内面に段を有している。56は口径13.2cm、器高3.8cm、57は口径13.2cmを測る。58～61は环身である。58は口径12.3cm、器高4.4cmを測る。墓道出土の破片と接合している。59は口径10.9cm、器高3.1cm、60は口径13.0cm、61は口径13.4cmを測る。62・63は土師器皿で、62は口径6.6cm、63は口径7.2cmを測る。64は平瓶で、口径7.1cmを測る。羨道中層で出土した。65～67は墓道出土の破片と接合した須恵器の甕である。65は口径20.4cm、器高34.0cmを測る。外表面は平行タタキで、内面は同心円当具と平行当具である。口縁直下に波状のヘラ記号がある。66は口径23.0cmを測る。外表面は釉がかかるやや不鮮明であるが、平行タタキと思われ、内面には同心円の当具痕がある。内面には自然釉がかかっている。67は口径26.0cmを測る。外表面は平行タタキで、内面は同心円當具である。

⑤ 墓道出土遺物（第19～22図、図版23・24）

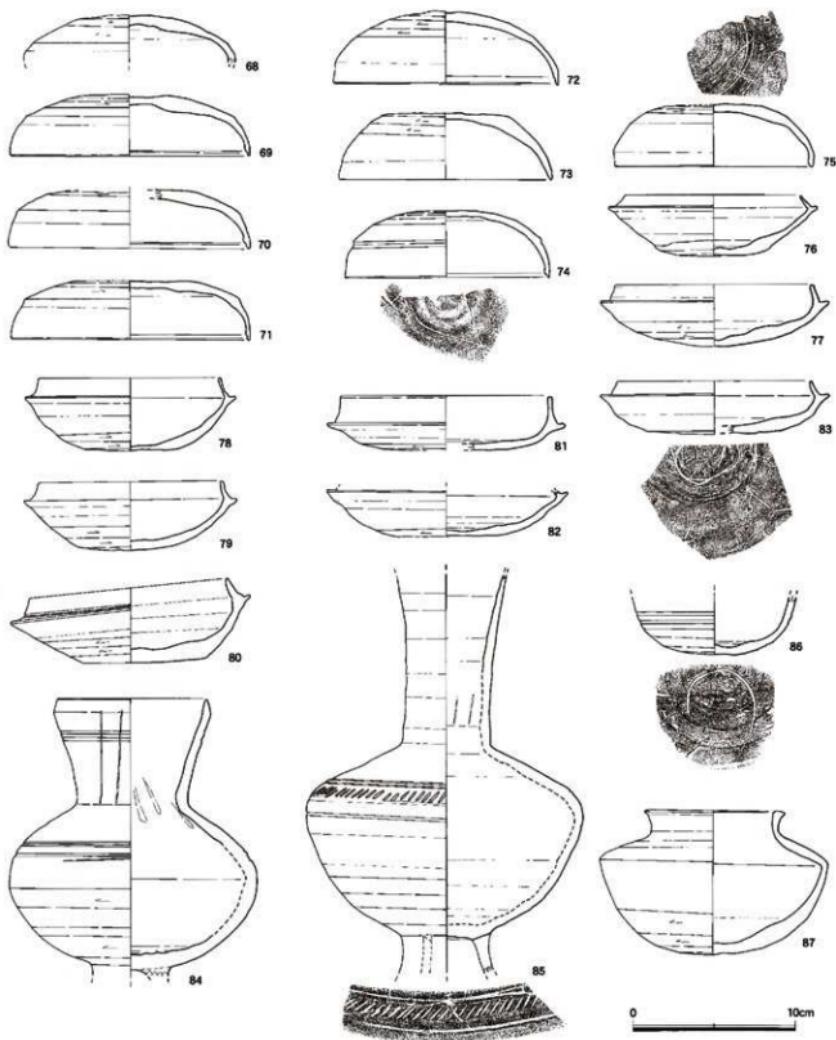
墓道では比較的多くの須恵器群が出土した。完形品もしくは完形に近い遺物が床面近くから出土しており、副葬時の位置、もしくは追葬時に玄室等から搔き出した副葬品群と考えられる。

68～75は須恵器の环蓋である。69～71は口径14.5cm以上、68・72・73は13～14cm、74・75は13cm未満で、69～72、74は口縁部内面に段を有している。また74は外面上に沈線状の段を有し、内面にヘラ記号がある。75は外面上にヘラ記号を有している。75は羨道中層・下層出土で、他は下層出土。76～83は須恵器の环身である。口径は81が13.0cm、82が推定13cm弱で最も大きく、12cm強のもの（77・83・80）、11cm前後のもの（76・78・79）がある。口縁端部は概ね丸みを帯びている。83は外面上にヘラ記号がある。78～83は羨道下層出土、76は羨道周辺の埋土、77は羨道上層などから出土した。

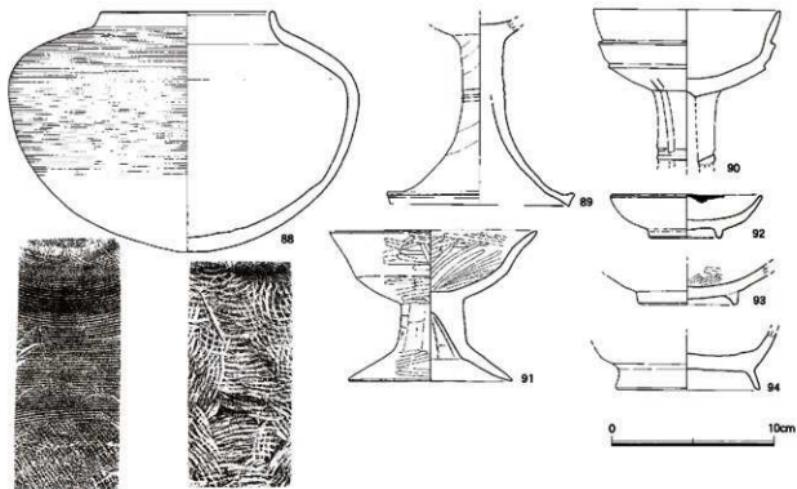
84・85は有脚の長頸壺である。84は口径9.2cm、現存の器高17.1cmを測る。頸部に2本縱方向の沈線を施している。85は現存の器高24.5cmを測る。胴部最大径の上に鋭利なヘラ状のもので施された斜方向の短沈線を施している。86は薬か、底部にヘラ記号を施している。87は短頸壺で、口径8.6cm、器高8.9cmを測る。外表面は回転ナデ、内面はナデ調整を施す。88は短頸壺というより無頸壺に近い。口径10.6cm、器高14.9cmを測る。外表面の大半はカキ目を施している。

89・90は須恵器の高杯で89は脚径11.4cmを測る。透かしは無い。羨道の石室入口部下層で出土。90は口径11.4cmを測る。透かしは3か所入っている。羨道入口部の上層で出土した。91は土師器の高杯である。环部は両面ミガキ、脚部は外面上部が粗いミガキ、上部がケズリの後ナデ、内面はケズリ気味のナデである。羨道入口部下層で出土した。口径12.7cm、器高9.2cmを測る。92は白磁の高台付皿で、口径4.4cm、器高2.7cmを測る。口縁端の一部が煤で汚れている。93は黒色土器A類で、高台径6.1cmを測る。94は須恵器の高台付碗で高台径8.8cmを測る。92～94は羨道及び羨道周辺上層で出土した。

95～99は須恵器・土師器の大型の土器である。95は須恵器の横瓶で完形品である。図10に出土位置の記載がある。石室入口の羨道下層で出土した。口径12.6～13.4cm、器高30.0cm、胴部の長径34.0cm、短径25.6cmを測る。胴部外表面は格子目タタキの後カキ目を施している。内面は同心円の当具痕が見られる。出土状況や遺存状況から本来の副葬位置に近いと思える数少ない土器である。96は須恵器の大型器台の裾部で、径45.0cmを測る。2条の横方向の沈線の組み合わせが3列あり、最下列は段がある。3列間は斜方向の短沈線を0.5～1cm間隔で引いている。両面に自然釉が付着している。羨道上層で出土した。97も須恵器器台の裾部で、裾部径28.8cmを測る。2条の沈線の組み合わせが2列あり、各列の間はカキ目と櫛状施文具による波状文を



第19図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図1 (1/3)



第20図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図2 (1/3)

施している。三角形の透かしがある。墓道上層と下層で出土した。98は焼成の良くない須恵器壺の底部で、墓道上層と下層から出土した。外面は格子目タキで、内面は同心円当具か。99は土師器の壺で、口径27.5cm、器高34.6cmを測る。底部は平底に近い丸底である。外面はハケ目の後ナデ、内面はヘラケズリである。石室入口部付近墓道下層で出土した。100と101は現場でM-2と名付けた溝(S D O 2)から出土したものであるが、S D O 2は墓道と考えられる溝であることからここに記載した。100は須恵器壺身で口径14.0cm、器高3.5cmを測る。101は須恵器壺で、胴部最大径10.2cmを測る。

3 その他の遺構と遺物

D-1号墳の東側で土坑群を検出した。土坑からは出土遺物も多くなく、時期のわからないものがほとんどであるが、画場第4次調査でさらにその東側を調査したところ古墳時代の堅穴住居群を検出している。またこの土坑群のある地点で、古墳時代の須恵器壺がまとまって出土した(1区土器溜まり)。あるいは古墳の副葬品を後世にまとめて遺棄したものかもしれない。なお、調査時は土坑をD、溝をMとして遺構番号を付したが、本書では土坑をSK、溝をSDと書き換えて報告する。

土坑

SK 01

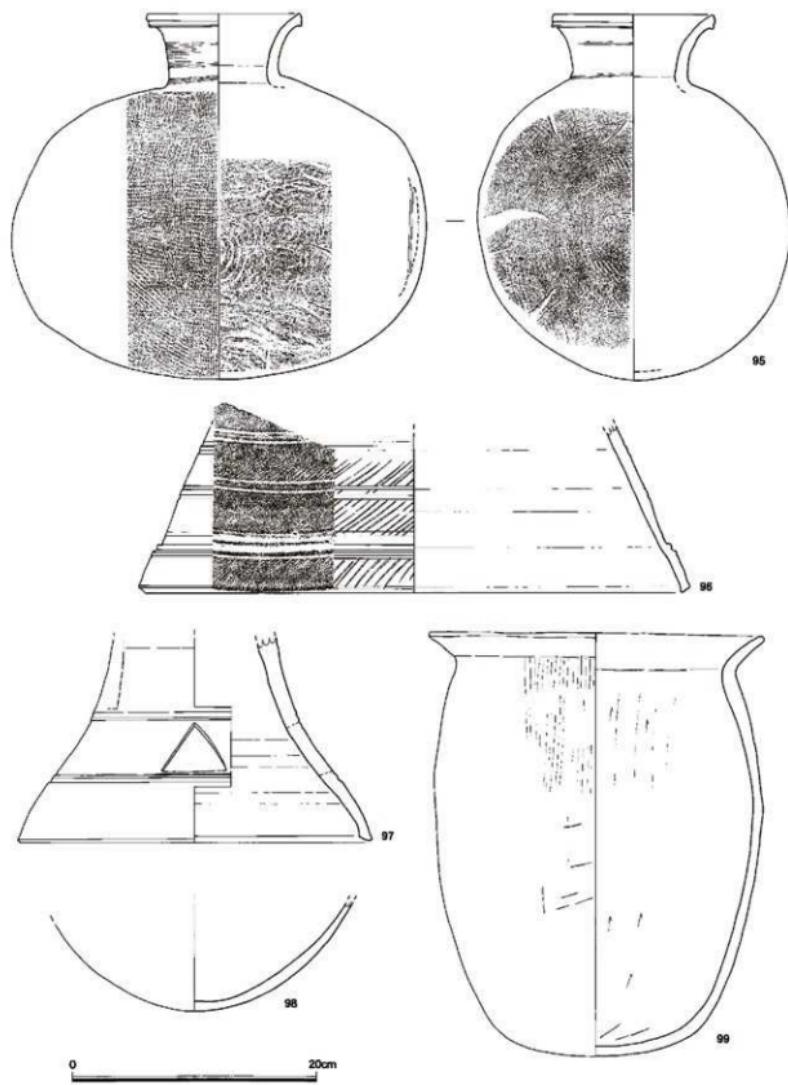
近現代の穴であった。

SK 02

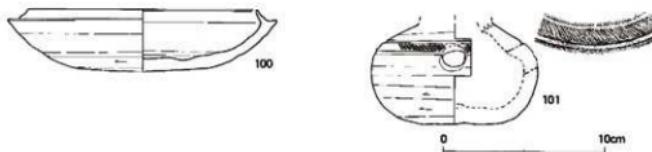
古墳のすぐ北側にある。長さ2.96m、幅1.91m、深さ約50cmを測る。東側は突出部のようになっているが、土層断面を見ても別の遺構と思われ、全体の平面形は隅丸長方形に近く、長さ2.5m前後を測る。土層断面に見える3層は根ではないかと思われる。古墳時代遺物が少量出土した。

出土物

102は須恵器の壺と思われる。胴部最大径9.6cmを測る。土坑内中層で出土した。



第21図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図3 (1/4)



第22図 羽根戸南古墳群D-1号墳墓道出土遺物実測図（SD02）（1/3）

S K 0 3

調査区北東隅にある。東側をS K 1 1に切られ、全形はわからない。現存の長さ約2.2m、幅約1.9m、深さ約70cmを測る。床面はほぼ平坦である。床面近くから土師器皿1点と白磁皿1点が出土している。古墳内からも多くの中世遺物が出土していることわざると、木棺墓または土壤墓の可能性がある。

出土遺物

103は土師器の皿で、糸切り底である。口径7.3cm、器高1.6cmを測る。104は白磁の皿で、口径11.4cm、器高2.9cmを測る。ともに下層から出土した。

S K 0 4

D-1号墳すぐ東側で検出した。平面形は台形に近い。長さ1.52m、幅1.52m、深さ約50cmを測る。遺物は出土していない。

S K 0 5

近現代の穴であった。

S K 0 6

近現代の穴であった。

S K 0 7

調査区北東隅近くで検出した。長さ2.44m、幅0.95m、深さ73cmを測る。床面はほぼ平坦である。土器の細片が少量出土した。

S K 0 8

楕円に近い不定形で、長さ1.28m、幅1.02m、深さ17cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、他の土坑に比べて浅い。

出土遺物

105は頁岩系の石材を用いた砥石の破片である。

S K 0 9

長方形に近い平面形である。長さ1.15m、幅0.93m、深さ10cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、他の土坑に比べて極端に浅い。

S K 1 0

近現代の穴であった。

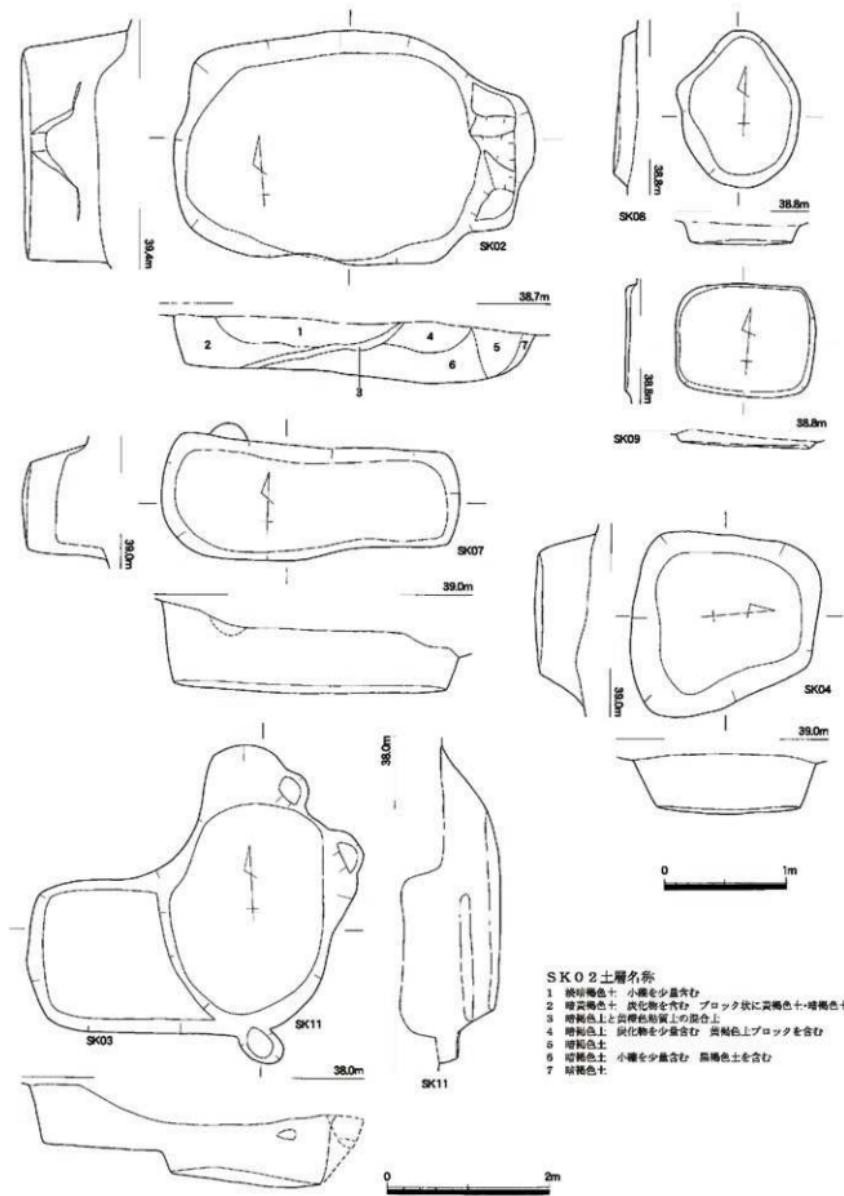
S K 1 1

S K 0 3を切っている土坑である。楕円に近い不定形で、長さ3.5m、幅2.5m、深さ1.2mを測る。床面はほぼ平坦である。他の土坑に比べてかなり深い。

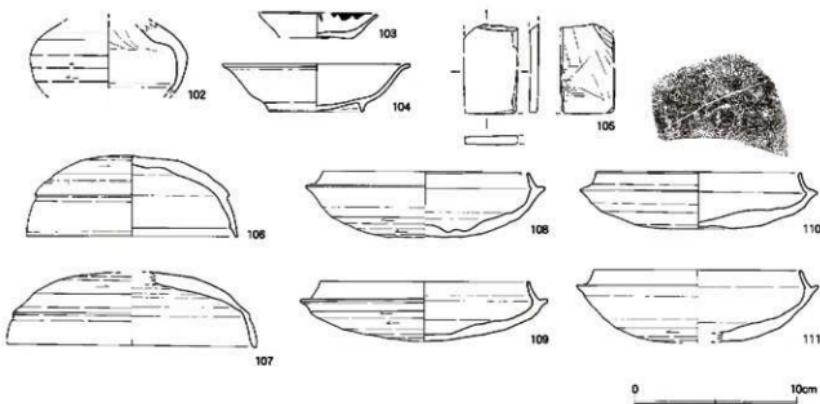
溝

S D 0 1

D-1号墳の北側で検出した。長さ約7m、幅0.6~1.8mを測る。床面はほぼ平坦である。他の土坑に



第23図 その他の遺構実測図 (1/40,1/60)



第24図 その他の遺構出土遺物実測図（1/3）

比べて深い。当初はD-1号墳の周溝の可能性も考えたが、SK03を切っていることなどから、古墳より後世の遺構と考えられる。出土遺物は小破片が少量出土しただけである。

S D O 2

D-1号墳主体部から続く溝で、石室前面で、石室主軸と90°に折れ曲がる。幅1.5m前後で、もっとも深い部分は60cmの深さがある。古墳の墓道と考えられ、調査区外へと続き、道路によって切られている。古墳時代遺物が出土し、図化したものは第22図（100・101）に掲載した。

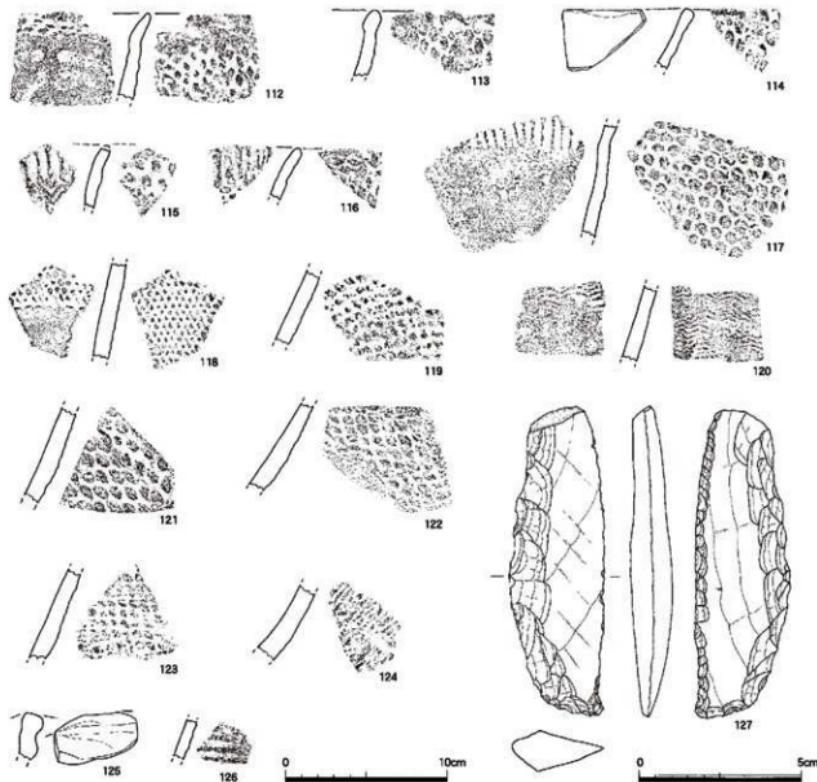
1区土器だまり出土遺物（第24図、図版24）

106～111は、古墳の東側の遺構群がある地点の遺構面上から出土した。破片も含めて大ビニール袋1袋が出土した。完形品は無いが、大きな破片が多い。古墳時代遺物だけであることから、盗掘時に、古墳副葬品のうち割っていたものをここに遺棄した可能性も考えられる。

須恵器の环蓋・环身がほとんどである。106・107は須恵器の环蓋である。106は口径12.8cm、器高4.9cmを測る。古墳出土のものに比べ、高さが高く、口縁端部内面のヘラによる段が明瞭である。107は口径15.3cm、器高4.5cmを測る。出土环蓋の中で最も口径が大きい。108～111は須恵器环身である。108は口径12.6cm、器高4.0cmを測る。口縁部は直線的に内傾し、あまり長くない。109は口径12.8cm、器高3.6cmを測る。口縁部はやや外反ぎみに内傾している。110は口径12.6cm、器高3.5cmを測る。受け部に明確な段が無いままで外反ぎみに内傾する口縁部に繋がっている。111は口径12.6cm、器高4.4cmを測る。この中では器高が最も高い。口縁部は直線的に内傾している。环身は4点とも口縁端部は丸みを帯び、明瞭な段は無い。

その他の出土遺物（第25図、図版24）

古墳や遺構から出土した縄文時代遺物である。112～126は縄文時代早期の土器片であるが、小破片が多く、傾きは不確定なものが多い。112～119・121～124は外面に楕円押彫文を施している。このうち118は穀粒文に近く、他は大粒の楕円文を施している。112～118は口縁部もしくは口縁部近くの破片である。112・118



第25図 出土繩文土器・石器実測図（1/3,2/3）

は内面上部にも楕円文を施す。112は口縁部外面上部には押形文を施さず、その部分の内面に楕円文を施している。113・114の内面は無文である。115～117は内面に縦方向の原体条痕を施している。115は外面に楕円文を、内面の原体条痕の下に山形押形文を施している。116の外面の押形文は直行する2方向に転がしている。120は口縁部近くの破片と思われ、外面と内面上部に山形押形文を施している。121～123は胴部の破片で、122・123は楕円文というより、格子に近い。124は撫糸文土器と思われる。底部に近い破片で、厚さ1cm以上を測る。撫糸も目はほとんど見えないが、松木田遺跡出土のものに近い。125は口縁部で波状口縁かと思われる。横方向のやや幅の広い突帯を2条施している。126は幅の細い突帯が3条確認できる。いずれも内面の調整はナデで仕上げている。127はハリ賀安山岩製のスクレイパーである。横長の剥片を利用している。基部を小さくつまみ状に作りだしている。下部は両面からやや粗い調整が施されているが、つまみ側の上辺は片側からのみ細かな調整を施している。先端部には自然面を残している。長さ8.4cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、重さ22gを測る。羨道部内に落ち込んだ堆積土から出土した。

4 まとめ

羽根戸南古墳群は、前述のように、羽根戸南古墳群第3次調査でG群を始め20基近い古墳を調査・報告しているが、今回報告したD-1号墳は、第3次調査とは少し離れた別の尾根にある古墳である。また飯盛西園場第4次調査では今回の調査区のすぐ東隣を発掘調査し、古墳時代の竪穴住居群を検出した。これらの隣接する調査を合わせて簡単にまとめる。

D-1号墳は墳丘がかなり攪乱され、石室も玄室奥壁が倒れ、両側壁も腰石付近しか遺存しておらず、床面もほぼ全面荒らされていた。それにもかかわらず羨道部には閉塞石がほぼ完存し、石室入り口部分から多くの遺物が出土した。また石室のプラン等も判別ができる。玄室部分の長さは約3.5m、幅約2.3mで、長幅比は概ね1.5対1である。玄室覆石は大ぶりであるが、倒れていた奥壁腰石の状況からは、奥壁も3~4石を積んでいるものと思われる。

羨道部から直接側壁を持つ墓道へと移行するため、羨道部をどこまで認定するか微妙であるが、北側側壁が床面プランが直線的な部分までは側壁の状況から天井石が乗るものと考えられ、長さは概ね3.6mで玄室の長さに近い。羨道部途中に櫛石等は無く、単室の整った横穴式石室である。

出土須恵器を見ると、墓道出土の56の壺蓋のように、口縁端部に段が付き、器高がやや高く、体部中央に沈線状の段が巡り、九州編年のⅢB期に位置づけられる。

当古墳石室と同様のプランのものを、調査基数の多い羽根戸古墳群E群と比較すると、E-11号墳が近く、やはりⅢB期の須恵器が出土しており、当古墳も概ねこの時期が築造時期と考えられる。当古墳の南側尾根に築造された古墳群を調査した羽根戸南古墳群第3次調査（E・F・G・H群）では、前期の前方後円墳から7世紀代の古墳までは途切れなく古墳が築造されているが、当古墳の時期だけが欠落している。ただし、未報告である飯盛西地区園場整備昭和61年度調査で行ったE-4~8号墳のうち、石室がほぼ全壊で近い状況であったE-8号墳では当該期の須恵器が多数出土しており、今後の報告書であわせて検討したい。

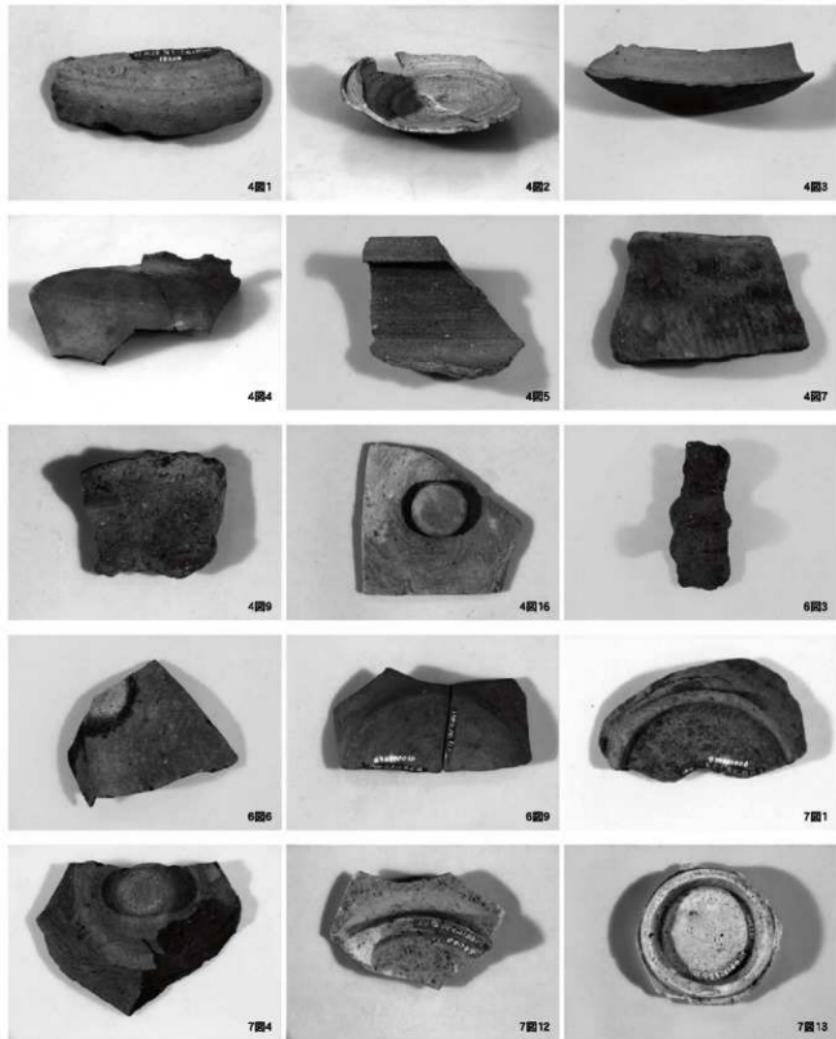
当古墳では、築造時期後の須恵器の他、古代の土器、中世の土器、近世の陶磁器も出土している。このうち中世の土器皿は、口縁部の一部が焦げ、焼が付いている個体が多く出土しており、燈明皿と考えられる。羽根戸南古墳群第3次調査においても中世期の陶磁器が完形品で出土しており、E-3号墳では、中世と考えられる人骨片も出土しており、中世期の追葬と考えられる。早良の横穴式石室では中世期に追葬を行った例が比較的多く、鎌倉の「やぐら」と同じ発想かと考えられる。

今後報告を行う予定である飯盛西園場整備昭和61年度調査では、E群の古墳とともに、当調査区東側の調査も行った。そこでは6世紀後半代の竪穴住居数棟が検出されている。詳細な検討は今後行うが、時期的に当古墳築造時期と比較的近い時期のものであった。残る昭和59年度調査とともに報告書制作に向けて鋭意努力していきたい。

図 版

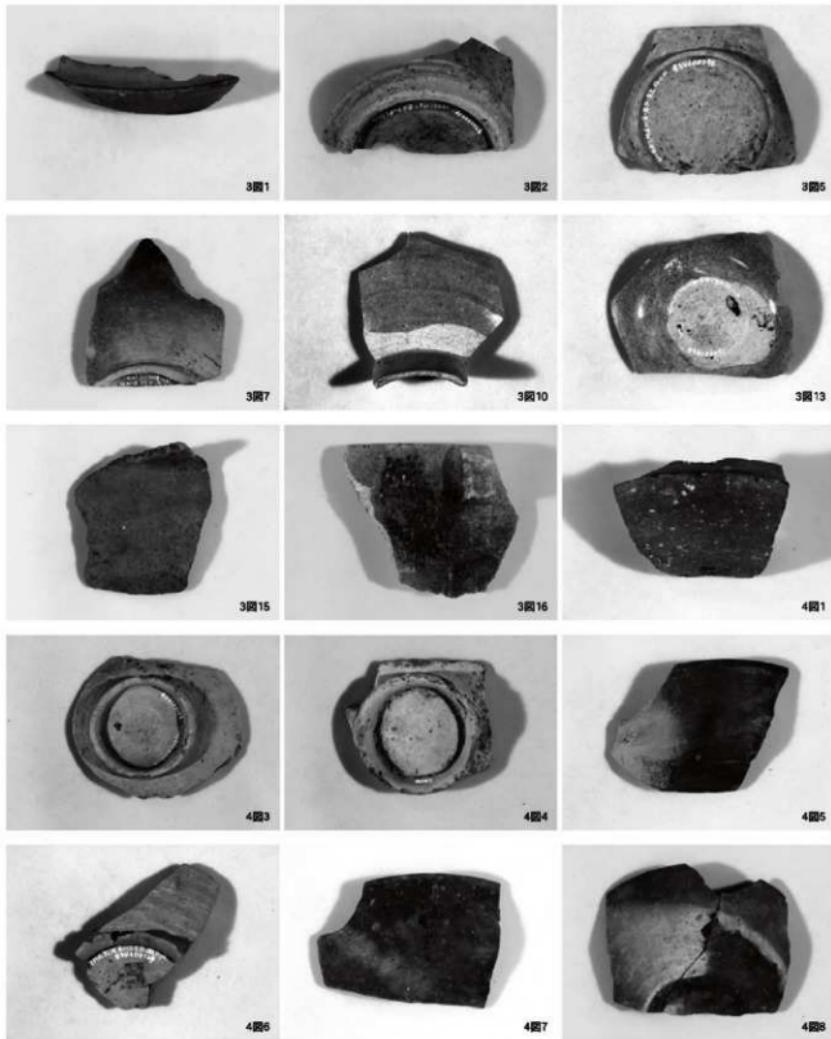
図版に使用している写真は、30年以上が経過しているため一部劣化してものがあります。

図版 1



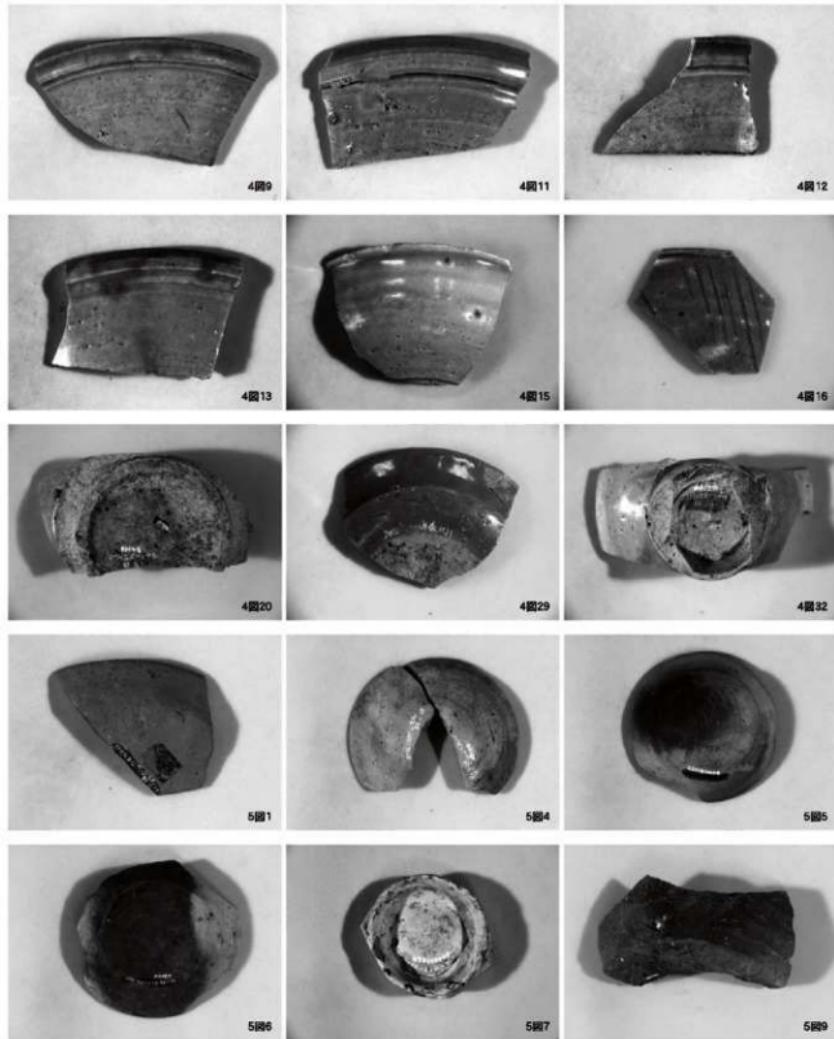
牛丸 B 遺跡出土遺物

図版 2



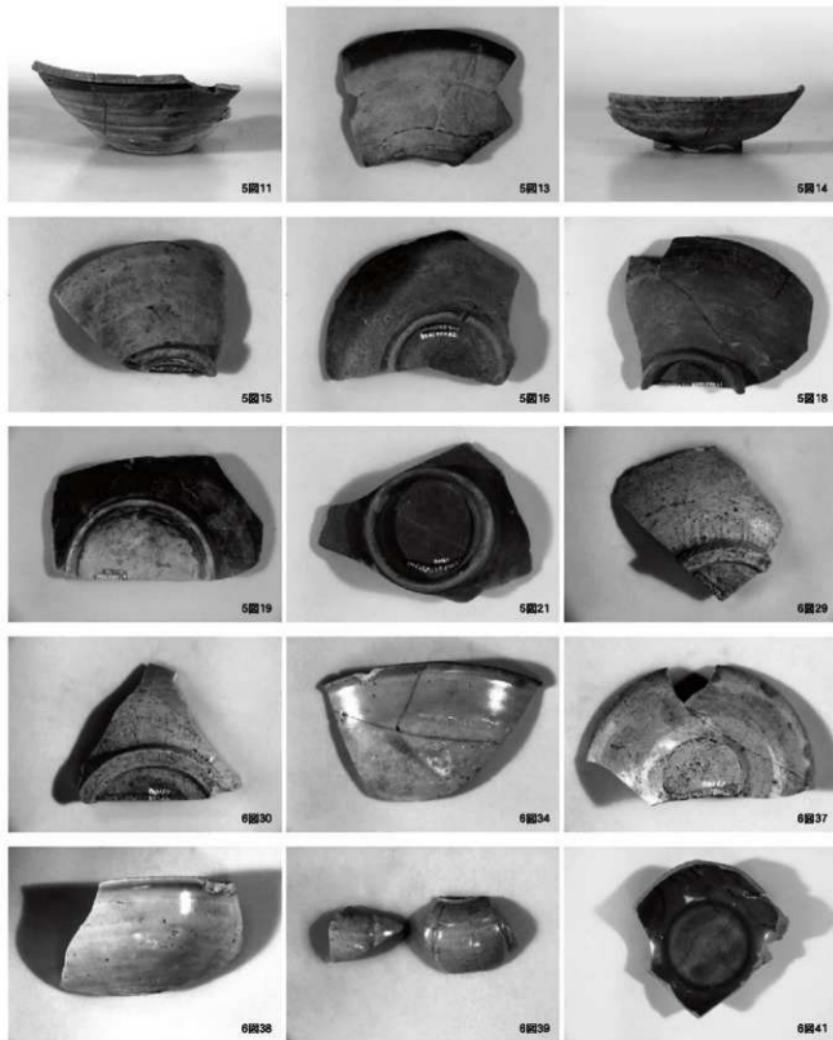
寺ノ上遺跡出土遺物 1

図版 3



寺ノ上遺跡出土遺物 2

図版 4



寺ノ上遺跡出土遺物 3



羽根戸南古墳群D-1号墳遠景（南西から）



羽根戸南古墳群D-1号墳遠景（東から）

図版 6



羽根戸南古墳群D-1号墳現況（東から）



調査区全景（東から）



羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘遺存面全景（南から）



羽根戸南古墳群D-1号墳墳丘遺存面全景（西から）

图版 8



羽根戸南古墳群D-1号墳石室全景（墳丘遺存面時）



羽根戸南古墳群D-1号墳石室全景（墳丘遺存面時・西から）



羽根戸南古墳群D-1号墳地山整形面全景（西から）

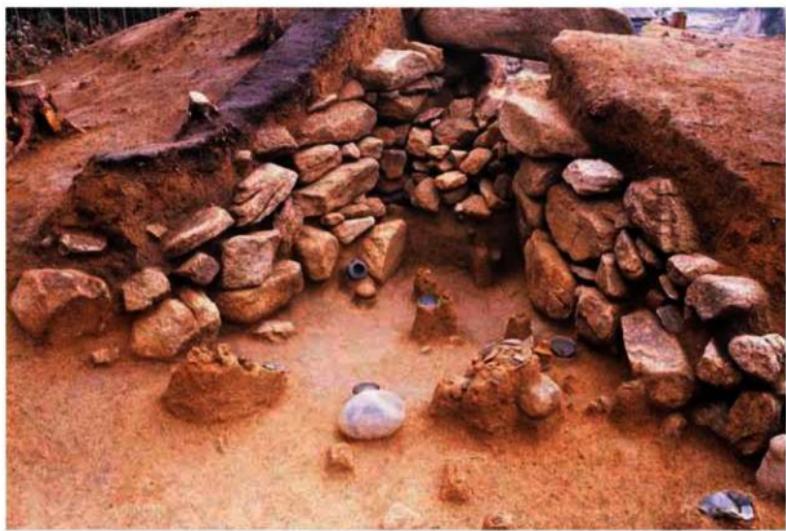


羽根戸南古墳群D-1号墳地山整形面全景（南から）

図版 10



羽根戸南古墳群D-1号墳石室全景（地山整形時）



羽根戸南古墳群D-1号墳石室入口部分



D-1号填玄室
(奥壁侧)



D-1号填玄室
奥壁



D-1号填玄室
侧壁

图版 12



D-1号墓石室
砾石



D-1号墓石室
闭塞石



D-1号墓石室
闭塞石



D-1号填石室
墓道・墓道全景



D-1号填石室
墓道・墓道北壁



D-1号填石室
墓道・墓道南壁

图版 14



D—1号填外覆列石



D—1号填填丘土屑
断面



D—1号填小石室
检出状况



D-1号墳小石室
掘り下げ前

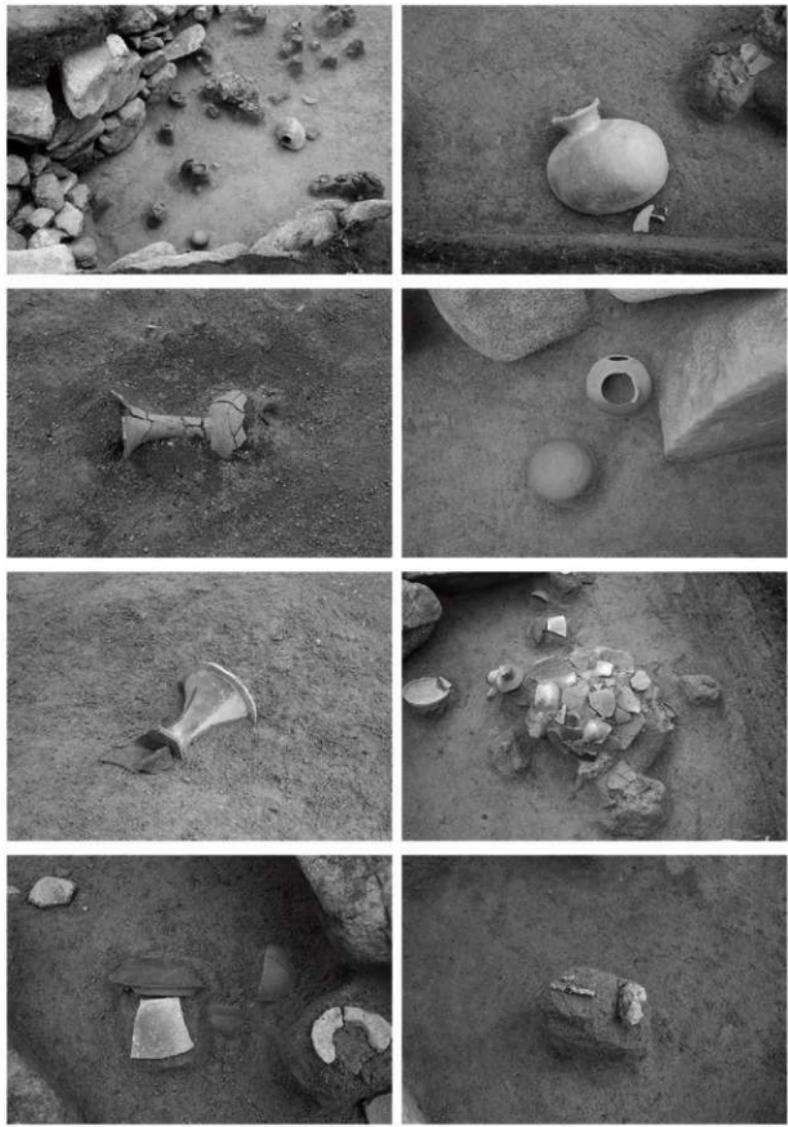


D-1号墳小石室
掘り下げ後



D-1号墳小石室
掘り下げ後

图版 16



D-1号填羡道部・墓道遗物出土状况



昭和60年度調査区発掘調査作業風景



遺構群全景（南から）

図版 18



SKO 2周辺
(南から)



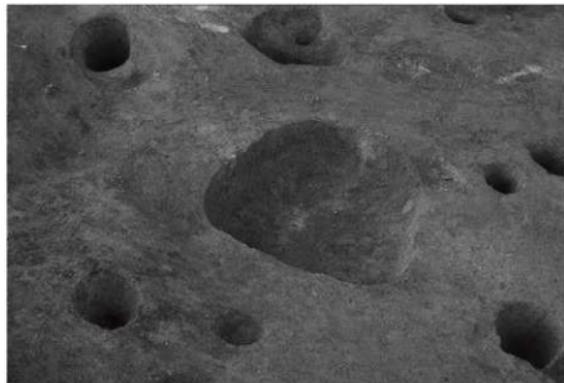
SKO 2 (南から)



SKO 2 土層断面



SKO 3 (南から)

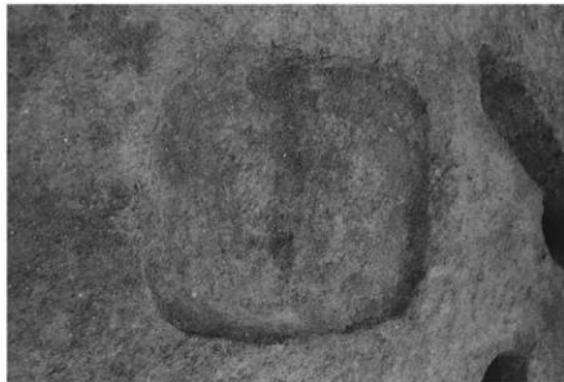


SKO 4 (南から)



SKO 7 (東から)

図版 20



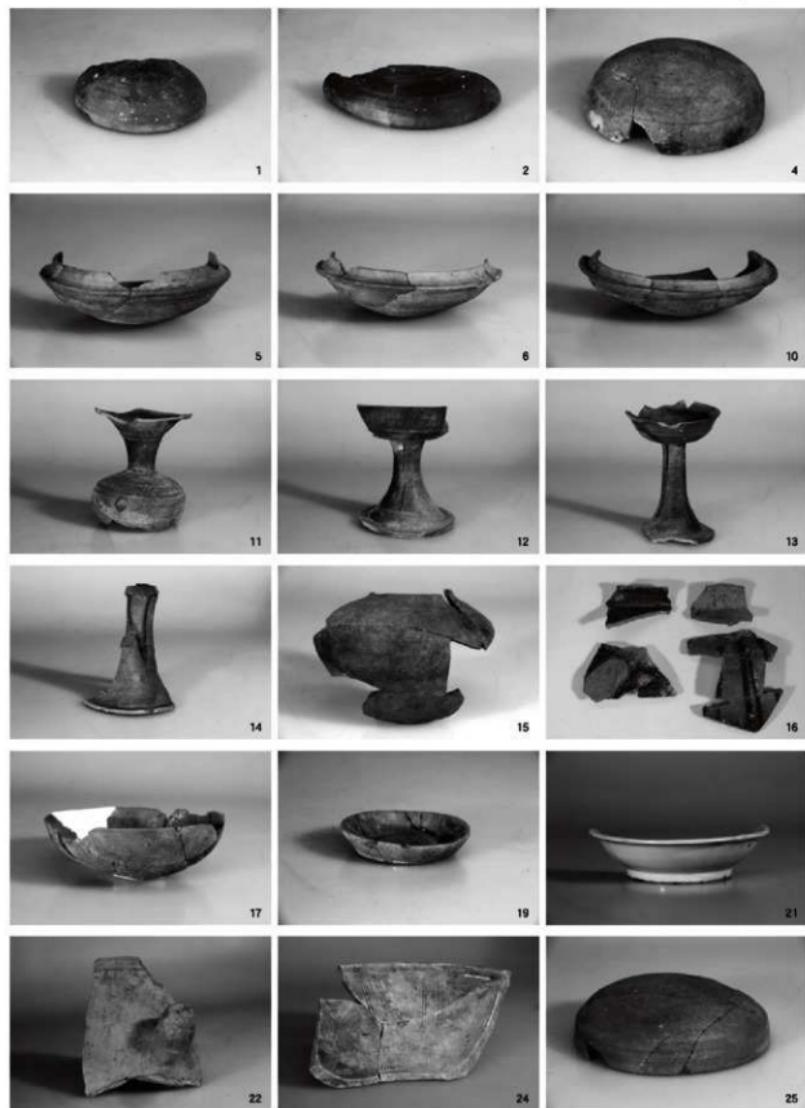
SK09 (東から)



SD01 (東から)

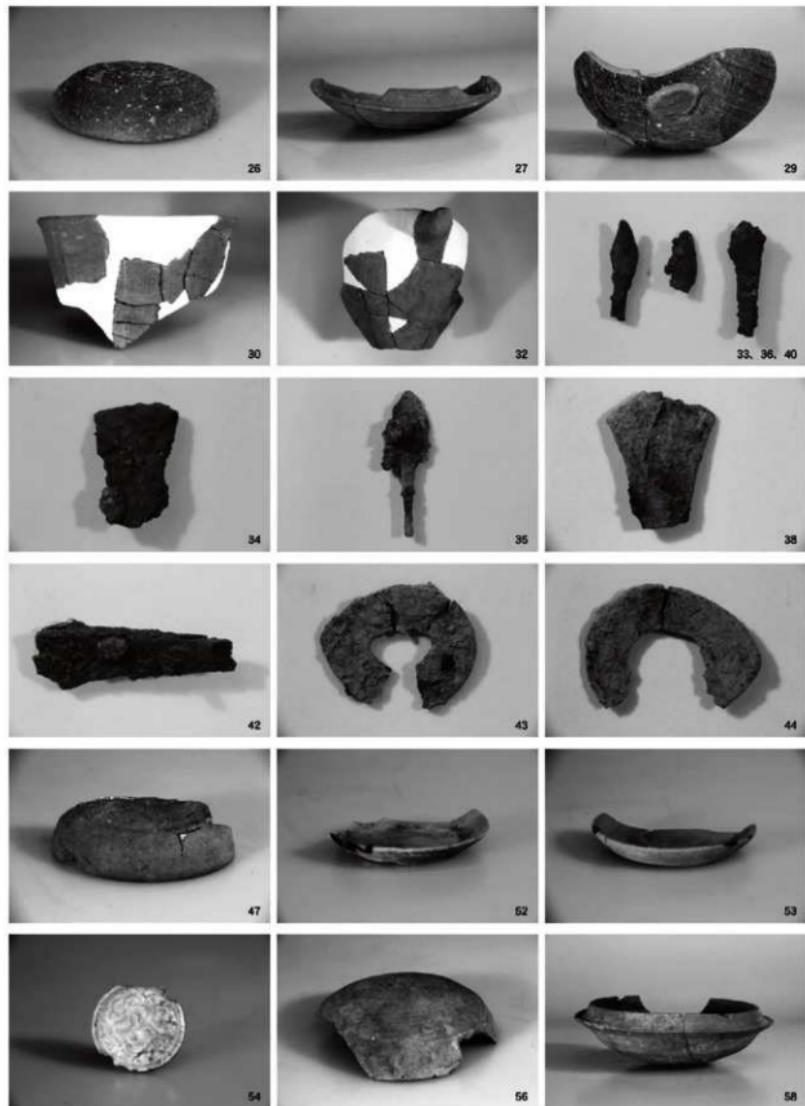


1区上器だまり

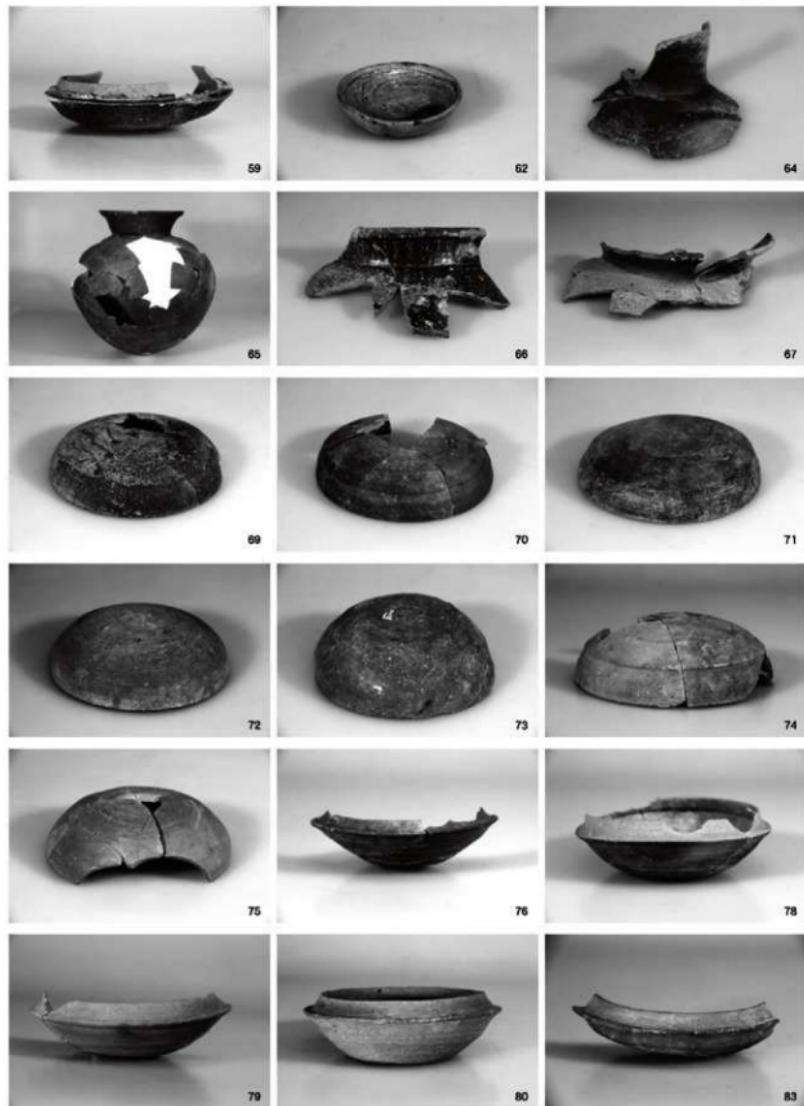


羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物 1

図版 22



羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物 2



羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物 3

図版 24



羽根戸南古墳群D-1号墳出土遺物 4

報 告 書 抄 錄

牛丸B遺跡1・寺ノ上遺跡1・羽根戸南古墳群2

飯盛西地区圃場整備関係発掘調査報告書1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1285集

平成28年3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 株式会社 ハザマ印刷

福岡県福岡市南区那の川1丁目20番23号

